

令和7年第2回総務経済常任委員会会議録

令和7年2月13日 議員控室

○事 件

所管課報告事項

- (1) あわびの養殖状況と今後のイベントについて（産業課）
- (2) 令和6年度ホタテ貝のアイヌブランド人業の未実施について（水産課）
- (3) イトウ養殖試験について（水産課）
- (4) 醸造用ぶどう栽培状況及び今後の予定について（農林課）
- (5) 物価高騰対応プレミアム商品券（R5～R6）結果報告について（商工観光労政課）
- (6) 熊石地域関係人口創出・拡大事業について（地域振興課・住民サービス課）
- (7) 新しい地方経済・生活環境創生交付金（地域防災緊急整備型）の活用について（危機対策課）
- (8) 八雲町津波避難計画改定案について（危機対策課）

○出席委員（6名）

副委員長	牧 野 仁 君	横 田 喜世志 君
	大久保 建 一 君	関 口 正 博 君
	宮 本 雅 晴 君	三 澤 公 雄 君

○欠席委員（2名）

委員長	安 藤 辰 行 君	倉 地 清 子 君
-----	-----------	-----------

○出席委員外議員（4名）

	赤 井 睦 美 君	佐 藤 智 子 君
副議長	黒 島 竹 満 君	議 長 千 葉 隆 君

○出席説明員（17名）

産業課長	佐々木 直 樹 君	商工観光労働係長	竹 原 利 亮 君
水産課長	吉 田 一 久 君	水産課長補佐	藤 原 悟 史 君
水産課主幹	多 田 玲央奈 君	農林課長	石 坂 浩太郎 君
農業振興係長	高 嶋 一 登 君	地域おこし協力隊	茂 木 琢 磨 君
地域おこし協力隊	茂 木 真友子 君	商工観光労政課長	井 口 貴 光 君
労政係長	渡 辺 直 樹 君	地域振興課長	田 村 春 夫 君
地域振興課主幹	木 村 清 君	住民サービス課長	北 川 正 敏 君
危機対策課長	田 中 智 貴 君	危機対策課長補佐	南 川 隆 雄 君
防災係長	横 木 潤 也 君		

○出席事務局職員

事務局長	野 口 義 人 君	事務局次長	成 田 真 介 君
------	-----------	-------	-----------

◎ 開会・委員長挨拶

○副委員長（牧野 仁君） それではちょっと早いんですけども、始めたいと思います。おはようございます。

先ほど安藤委員長が調子が悪いということで帰られたので、私が進行していきますので、よろしく願いいたします。

委員長挨拶は割愛させていただきます。

◎ 所管課報告事項

【産業課職員入室】

○副委員長（牧野 仁君） 早速三番目の所管の報告に入らせていただきます。

まず、①のあわび養殖状況と今後のイベントについて産業課からよろしく願いいたします。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） それでは、資料の説明をさせていただきます。資料の1になります。

概要につきましては、記載のとおりですが、昭和57年に旧熊石町が中間育成施設を建設しまして、その後、公社の建設は昭和62年になりますが、当時、鹿部町でボイラーを海水で加温して栽培していましたが、経費が掛かりすぎて採算が取れないということで、じゃあ温泉熱を利用して熊石に建設してはどうかということで誘致しまして、62年に種苗を作る施設を建設したということでございます。

記載しておりませんが、平成7年に第1回目のあわびの里フェスティバルを開催しまして、平成8年に海中養殖のアワビの養殖部会が発足しました。それから約28年海中養殖が続けられておりましたが、残念ながら解散したという報告を受けたところでございます。

次の解散理由についてですが、1点目の販売価格の低迷、こちらにつきましては、まず、天然あわびの価格が大きく下がっていることがありまして、漁協からの聞き取りでは、養殖開始当初は、天然あわびの価格が1kg1万円前後、高ければ1万2千円ぐらいまで上がっていたそうですが、現在は3千円代まで下がることもあるということでございます。

うちの養殖あわびはキロ換算にしますとだいたい22個くらい、1個あたり450gくらい前後で作っていますので、1kgあたり22個くらいになります。

あわびの里フェスティバルで1個400円で販売していますので、キロにすると8,800円くらいということで価格も天然に大きく負けている状況でございます。

餌代の高騰についてですが、消費税別の価格で令和2年、つい最近の価格と比較しても約1.3倍に上がっていて、消費税自体が上がっていますので3%のころと比べると今10%です。なので、全体消費税込みの価格としては1.4倍は上昇しているようです。

また、部会の人数についても、平成8年海中養殖はじめた当初は7名でスタートしまして、平成22年頃に若手の漁師へ世代交代で引き継いでおりまして、そのときに、初代から2名が残りまして、若手3名が加わって5名でやっておりました。このときに低水温平成26年にありまして、そのあとにリーダーでやっていた方が1名亡くなり、そのほかに若手2名が脱退し、ここ数年は2名で活動していたようです。2名体制になりますと、5名や7名でやっていたときと比べて労働力に非常に負担がかかるということと、ほかの仕事もやりながら大変な状況でも続けてきていたと。利益もほとんど出ない中で頑張ってきてきたという状況でございました。

2点目の公社の筋萎縮症の件ですが、公社は令和5年に筋萎縮症を確認しまして、令和5年から令和7年までの3年間調査を行うこととしております。令和6年に、5年は全く種苗の出荷していませんが、今年度の6年度に20万個くらい出荷したという話は聞いておりますが、熊石の中間育成施設では、令和7年までの調査がしっかり終わって、ちゃんとした結果が出るまで入れないと漁協のほうが決めているようです。結果的に海中養殖の部会としては、購入先がない状況ということで大変だけれども続けてきた中で購入先がないということで一旦解散するという事になったようでございます。

3点目の融資の返済については、解散の原因とか理由ではないんですが、逆に返すまでは続けなきゃいけないという状況でしたが、解散できない縛りがなくなったということでございます。

次に、現在の養殖状況でございますが、昨年5月のイベント後に残ったと申しますか、そのときに販売できるサイズに成長していなくて、残っていたあわびが約1万個あったそうですが、部会をやっていた方の1名が買い取りまして、中間育成施設で陸上養殖を現在しているということでございます。このうちどのくらいの割合かわかりませんが、次回の5月に行われるイベントに提供できることになるという話でございます。

最後に、次回のイベントについてですが、今回は、二海サーモンとあわびのフェスティバルとして開催することが1月27日の実行委員会で決まりまして、最後の1回もあわびだけでイベントという考えもありましたが、これから地域の特産品としてあわびに代わると思われる二海サーモン、このイベントをほかの地域よりも先にサーモンでやるということで、二番煎じにならないように、先に今年からやるということで、アワビとサーモンでやって、次のサーモンだけでやるにしてもそれに繋げるという意味で、今年は二海サーモンとアワビということで決定いたしました。

開催時期は例年同様に5月の第3週、5月18日（日）に熊石漁港のふれあい広場で開催するという事で決まりました。ただ、二海サーモンの販売方法なんですけど、たとえば1本そのまま売るとか、半身にして真空パックにして売るとか、その辺漁協や漁業者側の話ですが、まだまだ内容が全然決まっておきませんのでご承知おき願います。以上で説明を終わります。

○副委員長（牧野 仁君） あわび養殖状況についての説明が終わりました。いろいろ課長から概要と開催理由について残念なお話も含めて今説明を受けましたが、これについて皆さんからご質問等はございませんでしょうか。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口君。

○委員（関口正博君） 非常に残念なというか、残念なというか本当にこれでいいのかというのが先にきます。

熊石にとってのアワビというのは大事なもので、何としてでも残していくということが全庁的にそういう思いってなかったのかなって逆に思うんですね。ことあるごとに僕はサーモンばかりじゃなくて、やっぱりアワビとしっかりと両立させていく、柱が一本ではなかなか弱いんですよ。産業形態としては。

サーモンがこれからどの程度、産業として確立できるかというのはまだ不透明な中でせっかく熊石のアワビってイメージがあるのに、それを当然産業課としてもいろいろ関わってきたんでしょけれども、苦肉の策であろうかとは思いますが、それでも熊石としてはなくて、八雲町としてこのアワビというものをしっかりと維持していくってことが、ちゃんと浸透されていたのかといたら、これじゃあちょっとなくなってしまう残念な思いでいっぱいなんですよ。

それで、ちょっとお伺いしたいんですが、中間育成施設この陸上養殖を行っているということなんですが、どれくらいの規模で陸上養殖できるのかはリサーチできていますか。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） 水槽の数なんですけど、長い水槽 10 t 水槽、長い水槽で二つくらいでやっているような話は聞いています。私は直接見に行っていなくて申し訳ないんですけども。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口君。

○委員（関口正博君） もともと海中養殖で潜って潜水して餌をやるなんていう方法が本当に前時代的だなと思って聞いていたんです。ありえないです、今の時代では。もっと機械化などによって、当然そういう作業をする方の負担も軽減できるはずだし、それはお金で解決できるはずなんです。

そういうこともきつと求めて、僕もこれ何かでは言ったことがありますよ。たとえばユニック付きの船でカゴを上げて餌をやるという方法もあるんじゃないかだとか、言ったことがあるんですが、結局はそういう策も全然取らずに、もちろん熊石地域の漁業者が高齢化で人も少なくなっている事情はあるにしても、やっぱり何かしら策を講じていただきたかったなって。

それともう一つは熊石ばかりではなくて、八雲町というのは熊石漁協、八雲町漁協、落部漁協ってあるわけで、現状、噴火湾側はホタテ養殖がメインなのでなかなか難しいとはいえ、何かしら協力できる体制っていうものは構築できなかったのかなって。

噴火湾においても、天然アワビというのが現状において結構見られることになってきたのは聞いたことがあるかもしれませんが、だとするならば、熊石でそういう生産されたものを、たとえば噴火湾の海中で、噴火湾はほとんど皆さんユニック付きの船を持っていますので海中養殖することももしかしたら可能かもしれませんし、そういうことってできたんじゃないのかなって。

まだまだ熊石側がこういう理由でやりますではなくて、ちょっと全庁的に熊石のあわびを守る何かしらの策を協議していただきたいと思うんですが、どうでしょうか。それってできませんかね。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） まず、第一に種苗の種がないってまず今後者でどうなるかわからないって状況で、種がない問題でまず養殖できないのが一つと、あとうちの施設で海中養殖の施設ってかごを海中に固定しているんですね、ボルトで。だから上げ下げはまずできないと思うんですよ。

それで、ほかに浅瀬にかごを設置できないのかなとか、そういうことも自分の中では、係の中では考えたんですけども、どういうところがあるのかというのと、あと施設整備してやっていく方がいるのかっていうあたりでも、どうなんだろうなっていうところで話はその話はなくなったんですが、あと潜水の今の状況のままで続けていくのが無理強いできない理由が二つありまして、先ほど1名亡くなったという話をしたんですが、心不全で亡くなりました。

実際にずっと養殖で海中に毎週潜っていた方で、そのほかになまこや潜水漁業をやっていた方なので、だいぶ潜水が影響だったんじゃないかって、当時しっかりと調べてないので本当の原因わかりませんが、そういう話のございまして、その方が亡くなったあとにもう1名ずっと養殖続けてきた方も同じ時期くらいに亡くなりまして潜水って相当負担がかかるんだらうなってことで、無理に続けてくださいって言えないような状況だったことと、あり低水温でたくさん死んだときに、保険とかも海中養殖で適用にならない業種といいますか、適用にならないものですから、リスクを負ったままで続けてくださいって言うのも強く言えないというのがありまして、うちからは、たとえばお金出すからもうちょっと頑張ってもらえないかだとか、そういうのがなかなか言えない状況だったというのが正直なところです。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口君。

○委員（関口正博君） わかりました。当然、簡単な決断ではないんだらうなって、養殖深さにしてもそれはすごくわかりますが、今後、熊石にとってはこの産業ってとんでもない大事ですよ。これから将来考えたときにサーモンがその産業の柱として自立できるまでにはまだまだ時間がかかりますし、生産量にしたっておそらくは限界がある。

だとするならやっぱりアワビっていうのは絶対に僕は残すべきで、今の方法が駄目なんであれば違う方法を探す、そういう取り組みっていうのは絶対に必要だと思っていますので、何かの機会に僕もそういうことは求めていきますし、このまま僕は絶対に手放したら駄目だと思う。

のちにイトウが出てきますが、言葉は悪いけれどもこんなものやる必要ないですよ。こんなものやるなら、しっかりとあわびを確立できる方向で僕は話をするべきだと思います。どうか何かの可能性を探っていきたいし、僕らも勉強していきますので、よろしく願いいたします。

- 産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。
- 副委員長（牧野 仁君） 産業課長。
- 産業課長（佐々木直樹君） 部会は解散するってことでしたんですが、どうかたちで続けられるかとか私たちのほうでも研究とかいろいろ調べてやれる方を探したり、八雲で協力できる方がいないかとかそういったものを探りたいと思います。
- 委員（三澤公雄君） はい。
- 副委員長（牧野 仁君） 三澤さん、どうぞ。
- 委員（三澤公雄君） 同じひやま漁協管内だと思うけれども、福島町でアワビの陸上養殖がしっかりと続いているよね。彼らはどうやって稚貝っていうか種苗を手に入れているの。
- 産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。
- 副委員長（牧野 仁君） 産業課長。
- 産業課長（佐々木直樹君） 休憩をお願いします。
- 副委員長（牧野 仁君） 休憩します。

<<休憩>>

<<再開>>

- 副委員長（牧野 仁君） 再開します。
- 委員（三澤公雄君） はい。
- 副委員長（牧野 仁君） 三澤さん、どうぞ。
- 委員（三澤公雄君） 他町でね、そうやって稚貝を入れてやっているのかなと思ったので、それで質問したんですが、そうするとエゾアワビっていうものの資源量というか、それはこの先見通しが立たないっていう認識で熊石アワビも閉じるっていうそういうイメージで受け取っていいんでしょうか。
- 産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。
- 副委員長（牧野 仁君） 産業課長。
- 産業課長（佐々木直樹君） まず、先が見えないっていう状況で、海中養殖の方々が種を買うっていう場合には道の公社が卵から3cmまで育てたやつを今度中間育成施設、漁協が運営している町の間育成施設があるんですが、そこで3センチから5センチまで育てるんですよ。1年かけて育てるんですが、結果的に7年まで公社が調査しながらやって7年に良いもので来ましたとって出荷できる状態になっても、早くても中間育成施設に1年入れて8年入れて9年になると思うんです。海中に入れるのが早くて。
- それが7年に公社のやつが大丈夫ですよっていうふうになるのか、大丈夫ですよっていうか、筋萎縮症が中間育成施設に入れられる条件になるかどうかが見通し立たない状況だというふうには聞いています。
- それで、公社のほうにもどういう状況ですかというふうに確認したんですが、その筋萎縮症自体が水槽全部に回ったので、一回、水槽を全部きれいにして、親の貝とか卵を取るときに紫外線殺菌装置で水の中のは殺しますよと。生まれた卵もその洗卵といって、菌を落とす作業とかするんですが、洗卵したものを今年上ノ国で買ったらしいんですよ。それでもい

つもよりたくさん死んでるということでそういうリスク、どれだけ死ぬかわからないようなものを中間育成施設で入れたくないっていうのと、中間育成施設は今、筋萎縮症がない状態だと思いますので、その施設自体に菌がないのに、菌が入っているものを入れたくないっていうのがあると思うんですね。そういう状況だと思います。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤さん、どうぞ。

○委員（三澤公雄君） 俺、理解が足りないんだけど。

関口さん言ったように、アワビって産物、産業を熊石に残すって考えたときには、海中養殖にこだわらなくても今陸上養殖でいろいろ技術も開発されているわけだから、そっちに移行してもいいんじゃないかと。

そうだとすると、稚貝が手に入らないんだったらそういう投資もできないだろうっていうところが思ったので、だからね、稚貝が手に入らなくて諦めるっていう理解でいいんですかってことを聞いてるんです。

海中養殖に僕はこだわってなくて、アワビを残すためには新しい新技術、漁師さんにも負担がかからない。場合によっては漁師じゃなくてもできる陸上養殖というのは投資する値があると思うんだけど、アワビそのものが、エゾアワビそのものが、もう稚貝が手に入らないんだよっていう判断をしたっていうことでもいいのかな。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） 見通しが立ってないっていう、この先もずっと手に入らないってことではなくて、しばらくは手に入らないよねって判断だったと思います。

あと、そのほかに陸上で養殖したって話もあると思うんですが、中間育成施設で陸上養殖で漁協で5cmまで育ててるんですが、福島は55mmまで育てていて、小さいうちは食べる餌の量も少ないので、餌代も少なく済むんですが、陸上で65mmまで育てるとなると、海中のほうが成長が早いようで陸上だと採算が合わなかったような話を私、水産係員のころになんで陸上でやらないんですかって聞いたときには、陸上でやらないと採算があわなくて外注でやることにしたんだっていうことで聞いています。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） でも、陸上養殖って増えているようなイメージで業界新聞を読んじゃったんだけどもさ。

○産業課長（佐々木直樹君） ちっちゃいサイズだと思うんです、どこも。5cmとか。

○委員（三澤公雄君） それで回転させて出荷してるっていう。

○産業課長（佐々木直樹君） それで、そこで出荷するとある程度の採算が取れると思うんですが、そこからさらに1cmとか大きくするのに餌代もかかるし場所もとるし、その分餌もいっぱい食べるんで。

○委員（三澤公雄君） 熊石の組合さんは、5cmのサイズで出荷するっていう選択も諦めちゃってるわけ。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） うちの中間育成施設は海中養殖分しか作ってないんですよ。福島さんと、たとえば上磯とかどこかの漁師のかたにも売る分を作っているんですが、うちの中間育成施設は熊石の海中養殖分しか作ってなくて、そのほかには、なまことかそういうのをやっていますので。

○委員（三澤公雄君） 福島にも稚貝を作る施設があるんだ。ごめんね。なんか俺だけ理解してないで議論して、ごめんなさい。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） まずは卵から、卵をとって3cmまで育てるとするか2cmでもいいんですが、卵を取る施設というのは道の公社しかなくて、道の公社で卵をとっているって熊石の事業所だけなんですよ。道の栽培漁業振興公社の熊石でしか卵をとってなくて、そこから2cmで出荷したり3cmで出荷したりというのを、福島は2センチとかで買っと思うんですが、うちは3cmで買ったり、中間育成施設は3センチで買ったり、上ノ国も3cmとかで買っと思うんです。

ちなみに、道の公社は病気とか出る前は100万個とか作っていたと思います。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口君。

○委員（関口正博君） たとえば何cmまでは陸上養殖で、そのあとは今後海中養殖ですよって、いろんな技術は今はあると思いますし、検討する余地はあるのではないのかなと思っています。

あともう一点は、この販売価格の部分、熊石に関してはあわびの里フェスティバル用にしか作っていない、要はあわびの里フェスティバルで売るってことでしか単価というものは出てこない。そもそもそこがどうなのかってところなんですよ。

もっとも市場価値が、もちろん天然アワビが下がっているのはわかっていますが、売る努力というものをしてきたのかといたらそうではない。やっぱりあわびの里に出すものだけ確保する、生産するというのがメインになってきて、なかなか余計な部分にまで当然生産量も限られるものだからしょうがないんだけど、今いろんな可能性は模索できたはずなんですよ。

ですから、今後、口で言うのは簡単で申し訳ないんだけど、なんとかして熊石のアワビってものを、せっかくここまでブランドイメージつけてきて定着してきた中で、それで今、栽培公社まだありますが、生産者が前浜にいないとなると、将来的にこれだってまた熊石地域として存続するっていうのを決められるわけではないでしょ。これは道の機関ですから。そもそも熊石にある意味がないんじゃないかっていうふうになってくるのが無きにしも非ずですよ。

やっぱりこの八雲町でしっかりとアワビって事業を残していくのはこの施設の存続そのものにも関わってくるような気が僕はするんですね。何とかいろいろ研究を重ねてもらって残していただきたい。これで最後になるんだけどお願いしたいと思います。

それで北大さんも、この筋萎縮症はすごく厄介だなんていうのは前々から聞いている中であるんだけど、そういうものを研究していただくために熊石の意味合いは変わってくる可能性はあるけれども、北大さんとかにも協力していただきたいながら、この病気そのものがどのようなメカニズムでどうなっているのかというのをやっていただくのは熊石にせいかあるんだから、求めていっていただきたいと思うんだけど、目をつぶっちゃったけれども。

○産業課長（佐々木直樹君） ちょっと貝類の先生がどうだったかなってというのがちょっと、いないような話を聞いた気がするんですが、確かではないので喋れないなって。貝類の先生が今いないような話を聞いたことがある気がしまして。

○委員（関口正博君） じゃあ何のために八雲にお金を出して、熊石の施設を維持してるんだってなってくるんです。だから意味合いというのは、施設のある意味っていうものを八雲町の中でしっかりと求めていくのが大事なんですよ。

この先生がいるから、あの先生がいるからではなくて、イトウに一生懸命な先生がいるからイトウの海中養殖なんだろうけれども、ただそうではなくて、地域のためになること、道南のためになること、北海道のためになること、いろんな研究するために熊石に施設を置いてるんですから、そこはちょっと忘れていただきたいなというふうに思います。お願いします。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○副委員長（牧野 仁君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） 私もできれば続けてほしいという気持ちでももちろんいますので、いろんな方法を探りたいなというふうに思います。

あと全く何にもやってなかったじゃなくて、売り先とかでもふるさと納税も試したそうですし、小売り。たとえばミノリ商事さんとかとも、私が担当の頃に繋いでやりとりとかあったんですけど、なかなか小回りの利いた対応ができないと。

今漁師の体制もあるんですが、そういうのもあったということなので、なんとか続けられるようにはしたいなと思います。ちょっと難しいかもしれませんが。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口君。

○委員（関口正博君） ごめんね、責めるわけじゃない。

行政でやることって限りがあるんですよ。産業課だっているいろんな仕事をしてるんだから、そこにばかりもかかってもいられないだろうし。だけど話を聞くことはできるんですよ。漁業者の話をちゃんと聞いて、俺興味あるよって、すべて町がお金を出すんじゃないって、魅力感じた人たちだったら当然事業として残るんであればお金出すってこともあるかもしれないし、そういう可能性を探ってほしいってことです。

何もかも町でお膳立てしてどうのこうのなんて、そんなことはできないですから、そこは広くお話を聞くだけでもしっかりとやっていただきたいなと、そこから始めていただきたいなと思います。よろしく願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） あとほかにございませんか。

ないようですので、これで終わりたいと思います。ご苦労様です。

【水産課職員入室】

○副委員長（牧野 仁君） それでは二番目の令和6年度ホタテ貝のアイヌブランド事業の実施について、水産課から説明をお願いいたします。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） それでは水産課から2件ほど報告させていただきます。

担当より報告させますので、よろしくをお願いいたします。

○水産課長補佐（藤原悟史君） 委員長、水産課長補佐。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長補佐。

○水産課長補佐（藤原悟史君） それでは、令和6年度ホタテ貝のアイヌブランド化事業の未実施についてご説明させていただきます。

当該事業は、近年のホタテ貝養殖漁業において、前浜稚貝のへい死等により厳しい漁業経営となっていることから、生存率の高いとされている日本海産の稚貝を移入し、噴火湾海域に適合して、異常貝の少ない良質なホタテ貝に育成することが可能か否かの移入育成試験を実施し、可能となった場合はそれらをブランドホタテ貝として差別化を図り生産していくことを目的としております。

この事業の計画期間は、令和3年度から令和5年度の3年間としながら、令和5年度の採苗不振により令和6年度まで1年延長し、今年度が最終年度の年でありました。

令和6年度の事業予定としては、移入試験においては、稚貝丸かご1万5,200円を移入し、育成試験を実施すること、ブランド化に向けた具体的な内容の検討・実施を予定しております。

しかし、令和6年度において、全道的な採苗不振に見舞われ、移入稚貝の確保が困難になったこと、令和3年、4年に移入したホタテ貝について、異常な高水温の発生によりブランド貝としての成長が十分でないことにより事業を実施することが困難な状況となりました。

これらの状況を踏まえ、八雲町漁協等と検討し、監督官庁である内閣官房アイヌ施策推進室に状況の報告と今後の対応について相談をしてきたところ、令和6年度の計画を一旦取りやめすることとし、令和7年度から3年間改めて移入試験を実施して、併せてブランド化に向けた取組も進めていくこととしたところであります。

最終的には計画が承認となる時期については、3月中旬になる見込みであることから6月に補正予算を上程させていただく予定ですので、よろしくをお願いいたします。以上説明とさせていただきます。

○副委員長（牧野 仁君） ただいま6年度のホタテ貝のアイヌブランドの説明を終わりましたが、これについて皆さんからご質問等ございませんでしょうか。

（「なし」という声あり）

○副委員長（牧野 仁君） 次に入ります。

イトウ養殖試験について、ご説明をお願いいたします。

○水産課主幹（多田玲央奈君） 委員長、水産課主幹。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課主幹。

○水産課主幹（多田玲央奈君） それでは、イトウ養殖試験について資料に沿って説明させていただきます。

まず、資料の上段にあります試験の目的についてです。

ご承知のとおり、八雲町ではトラウトサーモンの海面養殖漁業の事業化ならびにサーモンの種苗生産事業を行い、道内で初となるサーモンの一貫した生産体制を構築しているところでございます。

この度、北海道大学水産学部から将来的に予想されます国内サーモンの過当競争に向け、現状の設備や手法を流用し、高価格帯が見込める新品種サーモンであるイトウの試験的な養殖について提案があり、二海サーモンに続く養殖魚として期待されることから北大との共同研究を行うものでございます。

つづいて、資料中段の試験の内容についてです。

まず、フェーズ1、親魚育成と種苗生産技術の確立です。2020年から熊石水産試験研究施設において海水による親魚候補を飼育しておりまして、2023年秋に淡水馴致に成功したことから、これら海水選抜親魚から採卵・人工授精を行うという段階です。なお、採卵や人工授精については北大で実施してきております。

つづいて、フェーズ2、中間育成から海水馴致です。本年5月にイトウの受精卵500粒程度をサーモン種苗生産施設に移入し、孵化・中間育成を行います。中間育成は翌年11月までの約1年半行いまして、種苗1尾あたりの重量は400gから500gを目指します。

つづいて、フェーズ3、海面養殖です。サーモン種苗生産施設で中間育成したイトウの種苗を令和8年11月に海水馴致を施し、海面生簀に300尾程度を投入して海面養殖試験を行います。

なお、イトウの海面養殖はサーモンと同じやり方を想定しておりまして、11月から5月までの約半年間、サーモンと同じ生簀に入れて育てる混殖とし、海水馴致・給餌・水揚げの行程は合同会社二海サーモンの協力により実施することとしております。

また、北大藻琴川系統のイトウは少なくとも1年魚で海水適応能力があることを確認済みではありますが、海面生簀でのイトウ飼育は未実施となっております。青森ではイトウの淡水養殖が事業化されており、出荷サイズ1kgから1.5kgとされておりますが、サーモンとの混色による海面養殖でどの程度まで大きくなるかという点も試験ということになります。

つづいて、フェーズ4、親魚の淡水馴致・選抜育種・全雌化です。効率的な生産に向けて海水で生育し、生残性の良い個体、海水選抜親魚の淡水馴致を行い、採卵に備えるとともに、海水中では死亡率や成熟率の高いオスの排除を目的に偽雄の作出と全雌種苗の生産を目指します。

これら4つのフェーズのうち、令和7年度からフェーズ2の孵化・中間育成を行おうとするものであり、孵化・中間育成が順調に進めば、令和8年度からフェーズ3にも着手するということとなります。

最後に、資料下段にあります、試験期間についてですが、令和7年度から令和11年度までの5か年を予定しております。

以上、イトウ養殖試験について報告させていただきます。よろしくお願いたします。

○副委員長（牧野 仁君） ただいま説明がありましたとおり、イトウ養殖試験について目的と内容を詳しく説明されましたが、これについて皆さんからご質問等ございませんか。

○水産課長（吉田一久君） 副委員長、すみません。

○副委員長（牧野 仁君） はい。

○水産課長（吉田一久君） ちょっと一点補足させていただきます。

先ほど説明の中で試験期間は予定している部分は5か年ということですが、これはそれぞれフェーズ1から4まで段階的に確認していった先に進むということにして、フェーズ4の全雌化の取り組みについては、まず選抜新魚の中から偽雄を作出するというかたちになります。

その部分の技術が現在北大さんでもこれまで何回か試したことがあるようですが、結構困難で難しいとされているようです。仮に偽雄が作出されて、その後その雄が生殖機能を持つまでは一定の期間かかりますので、最短でこの令和11年までの5か年の間で全雌化の種苗の生産が可能であるか確認は最短でできるかなと思っているんですが、先ほどの偽雄の作出の部分でいろいろ難しいということもあるので、この5か年の期間は若干フェーズの段階の進み方によっては延びる可能性もあるということですので、よろしく願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） わかりました。

今説明の中で皆さんから何か質問ございませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口さん。

○委員（関口正博君） 八雲町のサーモン養殖の歩みというのはまだまだ始まったばかりにも関わらず、これからのこれらの過当競争に向け新しい魚を養殖すると、ブレブレですね、八雲町。なんかすごく残念だと思います。これからサーモンというものを事業として確立していかないとならないのに、これから過当競争が起こりえるからまた次のものの試験を始めていきますよって。それで熊石のせつかく今まで歴史的に育ててきたあわびを事業として残せずに合同会社二海サーモン、イトウの協力をするってすごく残念だなと思います。

それでこの試験というのが5か年にわたるといことですが、ここにかかる費用はどのようになるのか、これは町が全部負担することなのか、わかっている範囲でいいので教えていただきたいと思います。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） まずフェーズ1の新魚育成と種苗生産技術の確立は、採卵の部分でございますが、これはすでに熊石水産試験研究施設で10tの水槽海水を満たしまして、そちらでイトウのほうを育てておまして、その部分はすでに済んでおります。これは、北大さんのほうで採卵あるいは人工授精については北大さんのほうで行うということになります。

フェーズ2の中間育成を今年の5月から行うことで、イトウの受精卵、イトウは春産卵ですから、春に受精卵を鮎川のサーモン種苗生産施設のほうに持っていきまして、それを孵化または中間育成にすることですが、数的なものは500粒ということで数は相当少ない

状況です。それらにかかる餌代はそんな量が多くないので、令和7年度予算の中ではイトウの試験に対しまして特別に予算を組んでいるものはございません。サーモンの種苗生産事業の中で賄いきれるのかなってというようなことで考えてございます。

このフェーズ2の中間育成が順調に進んだ際には、今合同会社二海サーモンさんにご協力いただけることとなりまして、そちらのほうでサーモンと一緒に育てていただくということになります。それは令和8年の11月にサーモンと同時にイトウのほうも入れようかと思っていて、その際に種苗の生残率ってことで300尾っていうことで今想定してございます。それらにかかる餌代については、どの程度大きくなるのかということもありますが、増肉係数をサーモンと同じように考えた場合には、シーズン通して必要な餌の量はだいたい40袋から50袋程度でないのかなと思っています。

そのこの部分は、今の合同会社さんに負担させるわけにはいかないもので、それは町のほうで餌代ということのみようかなと思っています。

少なくともかかる予算、町のほうで負担する予算は、お金的なものでは餌代程度なのかなということで今の部分は想定してるところでございます。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口さん。

○委員（関口正博君） そもそも今やっている八雲町で行っているサーモン。当然これから先スケールを求めないとならない。こんな希少価値なんてないんですから。このサーモンに関しては、その辺に関してはどう思っているんだろう。

せっかくイトウを入れるスペースにサーモンを入れれるとすれば、300尾くらいだからそんななんでもないんだけど、これから八雲町としてこのサーモン事業を海面養殖に関してどうするかっていうのは、すごく残念なんです。たくさん量を作ってある程度ペイできるよっていう品物だと思うんです、このトラウトに関しては。

なのに、こういうふうな事業のために、もちろんこれはこれで大事で尊いものだっていうのはわかるんだけど、サーモン養殖事業に対する本気度というのは町として、これで僕は揺らいじゃったなと思うんですけども、その辺課長どうですか。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） 二海サーモンプロジェクトに対する取り組みについてはこれまで同様、挙力に推し進めるものとしてございます。

今回イトウの養殖試験については既存の施設、あるいは既存の方式、特別な加えることなく並行してやれるという部分で大きな負担もなく、なおかつ数も500尾。ここは試験管レベルでの試験だと思います。

要は、将来的に北大水産学部のほうから将来的にいろんな地域でサーモンの養殖も取り組んでいますが、それはもちろん熊石の事業者の部分はサーモンが柱であることはこれからも変わらないはずで。

それにプラスアルファとして、付加価値的なものがあるのであればってことで、将来へ向けた可能性を探るということで規模は小さいんですが、試験としては始めると。それは既存の持っている資産を活用できるというような部分でありますので、特別大きくこちらのほ

うに趣を傾けたってというようなことではなくて、これからも将来的にも変わらずサーモンが柱であることは変わりませんので、その辺はご理解いただきたいと思います。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口さん。

○委員（関口正博君） 先ほどもアワビの件で言ったんですが、この熊石の水産研究施設に移しますが、そもそも北大のためにやっているものではないんですよ。昔から北大にはイトウに関する研究している教授がいて、その方がプッシュするからということでしょう。しかし、地域のために北大のためにある施設ではないですよ。

ですから、もちろん研究は結構なんだけれども、そんな負担感がないんであればいいんですけども、将来的にこの地域のちゃんとなめになるというか、そのような研究施設でなければならないし、その意味合いというのは北大がもたらすのではなくて、やっぱり八雲町がもたらしていかなければならないんですよ。

こんな北大のいいなりの施設ならば、言葉悪いけど、なくてもいいと思うよ、申し訳ないけれども。そういうふうに見らさるんですよ。イトウをこうやってやるっていうのはすごく残念だと思って、僕はイトウ自体に何の恨みもないですけど、ただ市場価値もまた確定していない中でこれから作り育てていくものだからすごく長い年月がかかるでしょう、研究ですから。

であるならば、トラウトのスケール、量というのを徹底的に検証するほうに向けていったほうが、僕は何より町のためだろうなと思うんです。これから種苗生産施設もできていくわけだからね。その辺は、見誤ってほしくないなということをお願いして終わりますが、よろしくお願いいたします。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） 関口委員がおっしゃるとおり、これからサーモンからイトウにシフトするわけではなく、サーモンはこれからも将来的にも柱として規模拡大やそういった事業の効率化やいろんな今現在ある課題については、一つひとつ挙力に整理して課題解決へ向けていきたいと思っています。

それにプラスして、このイトウが将来的にやはりサーモンに変わるわけではないんですが、サーモンにプラスアルファとしてこの養殖漁業に携わる方々の一つのオプションとして、漁業経営の安定にもつながる可能性があるものであるならば、今の段階から始められるなら始めたいと思います。

この資料中ではないですが、すでに青森のほうで淡水でのイトウ養殖というのが小規模ながら行われておりまして、そこで取引されている魚の価格はキロ1千円から6千円といわれています。ただ、サーモンのように育てやすい魚ではないのは確かでありまして、この海面養殖でやるって取り組み自体がどこも行っていないってことなので、将来的にこれがものになるかどうかははっきり言ってまだわからない。不確実なものがたくさんあります。

ですから、これからもサーモン養殖を主眼に置いて進めることはもちろんですし、イトウにシフトするですとかブレていくってことではないということで、ご理解いただきたいと思います。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口さん。

○委員（関口正博君） シフトするっていうふうには全く思っていないよ。無理だと思ってるからね。そもそもサーモンがメインなんだけれども、サーモンもまだ歩みは始まったばかりだからここはしっかりとやっていただきたいなっていうのがまず一番です。

イトウはひっそりとそんなに予算がかからないものであれば、サーモンのほうに影響がないようにやっていただきたいなということです。よろしく願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） ほかに。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤さん、どうぞ。

○委員（三澤公雄君） まず、この資料の4行目の過当競争という言葉の使い方がどういうふうに使っているのかな。少ない中で競争して勝ち抜くっていう意味なのか、もう一つは、勝ち組が少ないよっていう中で勝ち抜いていかなきゃっていう使い方をしているのか、まずこのことをお聞きしたいんですけれども。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） 今現在サーモン養殖、海面養殖については特に檜山日本海沿岸の全ての町で今年から取り組みが始まります。それで養殖に使われる種苗は、全て熊石から供給されることとなっています。

令和7年度の供給量がおおよそ5万尾程度で令和8年9年度に至っては8万尾まで増えるのかなと予測しています。多分、今後もこのサーモンの養殖っていうのは、今のニジマスあるいはアトランティックそれぞれサーモンって二種類あると思うんですけれども、それらが主体となって伸びていくのかなと思います。もちろんサーモンそれぞれ産地ごとに、特徴のある生産の取り組みなどしながらブランド化というのを進めていくのも必要かと思いますが、それらに加えてもう一つ特徴的な紅サーモンというものは、希少価値ですとかいろんな幻の魚やそういった意味合いの中で一つアクセントも付けられるのかなっていうことです。

将来的にたくさんサーモンの取り組みが進めば進むほどブランド化、差別化を図るって部分が難しくなっていくのかなって部分での過当競争って意味かなということで、それで水産学部さんは早くから熊石の実験施設の中におきまして将来的には海面養殖事業、これが地域の漁業のプラスアルファになる取り組みに期待して進めてきたということもありまして、これらの成果を今現在八雲町では種苗生産施設も持っていますし、また海では海面養殖施設もあるということで既存の資源を活用して取り組みができるってことで、試験管レベルの仕事ですが進めたいということで始めたってことです。

いずれにしても、将来的にどういったかたちになるのかっていうのは不確定な部分もあるんですが、やはり熊石に一つのサーモン、北海道内ではじめて取り組んだサーモン、プラスアルファオプションとしてイトウっていうのも一つ魅力のある魚種なのかなということで、先般報道会社の方々とも協議しましたが、ちょっとおもしろいなっていうようなこ

ともあったので、じゃあやりましょうってことで進めさせていただくというかたちになったので、ご理解をお願いしたいと思います。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤さん、どうぞ。

○委員（三澤公雄君） 僕も関口さんと同じようにあまり面白味を感じないんだよね。できちゃったものが鮭科であれば、今、取り組んでいる二海サーモンとどんな違いが出てくるのかなっていうのが、買う方に見てみたらそんなに差がないのかなと思うんで。

一方で、この取り組みで魅力があるのは卵を作れるんだよね。それが決定的に二海サーモンとは違うことでしょ。それであれば、そこで循環ができるのかもしれないけれども、卵を売り物にするっていうことを最初考えたんだけど、牛の頭があるからさ、無事出産ってイメージがあるんだけど、魚が卵を生きた状態で採卵させるっていうのは確かあんまりないよね。だいたい卵を取っているのはキャビアも含めて、腹割いて出しちゃうから、身はその場で食べちゃいますよっていう。

でも、卵をとれるんだ。だから、卵を商売にするっていうことと身は二次利用みたいな感じで、そうすると二海サーモンとの差別化もできるし、他ではできないことだと思うので、それなら少し魅力があるのかなってこと。

そのほかにもう一点は、どうせ研究機関が入るんだしたら、餌の自給いろんな残飯も含めて虫の幼虫を餌に使うと、今魚に魚を食わせてるんだよね。貴重になっている水産資源のイワシとかだつてこの先どうなるかわからないから、差別化を図る、八雲の商品の魅力を上げるには餌を作るってことを研究機関にやってもらったほうが、イトウも二海サーモンも食べる虫のレベルは変わらないと思うので、そっちの研究したほうが同じような鮭科の肉を将来生産して差別化っていうよりもずっと魅力的じゃないのかなと思うんですが、この卵の生産利用っていうことと、餌の開発ってこと、これは全く考えられないものでしょうか。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） まずは三澤委員さんのご意見はごもっともかなと。というのは二海サーモンをこれからのブランディングしていくうえでほかとの差別化っていうか、特徴的なものはどうするかっていうと、やはり餌にあるのかなっていうのは僕自身も思っています。

ただ如何せん、餌の試験につきましても、なかなか現在国内で餌を作れる部分というのはなかなか業者的には少ないっていうのと将来的にはそのロットがある程度まとまらなかつたら値段的なものの反映はうまくいかないっていうのがあります。

ただ、常にこの餌をどうしようかっていうのは話題にはなっております、ひやま漁協さんのほうともそういったことでお話し合いはさせていただいておりますが、まだ具体的にはこうしようというお話にはなっていないのが現実的ではあります。

ただおっしゃるとおり、差別化を図る部分ではやはり特徴的な餌、特に八雲町の地域でとれるようなそういったものを混ぜるですとか、そういったことは常に話題には上がっているとこでございます。

あと、イトウは、シロザケですがサクラマスと違って一回の産卵では死ぬ魚ではありません。だいたい5年から6年程度は産卵したまま採れるっていうものがございます。ですので将来、イトウが大きく養殖が拡大していくような状況になるならば種卵を販売するのも当然ながら視野に入るものかなと思っていますが、ただ全て海面養殖の取り組みやあるいは全雌の取り組みみたいなものはまだまだ始まったばかりというか、これから手をかけるということなので、まだ先を見通せていない状況ですが、おっしゃいますとおり、種卵を売っていくっていう部分は大変面白い事業であるのかなってことも思っておりますので、この今回の4つのフェーズが順調にいき、さらに市場あるいは消費者から評価されるものならそういったことも視野に入れながら検討を進められるのかなと思っていますところでございます。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） フェーズ用の全雌化っていうのは、メスのほうが肉質がいいとかってあるのかもしれないけれども、全雌化のその先はさ、全てのメスから卵をとるということを考えたら、一万尾から全部卵をとれるって考えるの。雄雌半々で半分になっちゃうけれどもね。フェーズ用の目標は僕はいくら販売というか、それを目標にしてもらいたいなと思うので、目指してもらいたいなと思います。

それと餌ですが、僕が言っているのは、今ある資源を食べさせるんじゃなくて、いわゆる今人間の昆虫食って出てきていると思うけれども、あの中で研究されている水アブなんかの養殖の幼虫を人間が食べるよりも魚に食わしたほうが、その魚を食べるほうがずっと合理的だなと思うので、そういう意味での人間が利用できないもの、もしくは残飯も含めた、そういったものを水アブ等に食べさせてその幼虫を餌にするっていうイメージで喋ったんです。

内地でやっぱり本州でそういうことを小さい単位だけれども、確か成功させて有機認証をとったサーモンなんかがあるって聞いたので、先越されたなってイメージはあるんですけども、せつかく二海サーモン。北海道でサーモンの先陣を切った八雲町ですから、北海道で先んじて餌の需給なんかをやったほうが商品化としては差別化が図れると思ったので、是非研究してください。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） 三澤委員がおっしゃるとおりでございます、虫を主原料にした餌っていうのは本州のほうでいろいろと取り組まれておりまして、またそのことによる食味の部分で虫の臭さみたいなものが問題になったりしてるということもあります。ニチモウさんかどこかでは、今のハエか何かの幼虫を使ったものがそういった抵抗感なく食べられるような魚もできたっていう取り組みも聞いています。

以前、道総研から道内のほうからやはり道内でこういったサーモンの餌を試験的に作りたいと。その原料は今の魚粉に代わって昆虫を使ってっていうような提案も実は一回ありました。その後そのことについては我々も協力したいというような話をした経緯もあつたんですが、具体的に実際に進んでいないっていうようなことも正直あります。

ですが、やはり餌っていうのはなんらかのいろいろありますよね、瀬戸内海だと柑橘類を入れた餌とか特徴的な部分を出すためには餌を工夫するっていうのが一番わかりやすい部分でもありますし、そういったことは必要なのかなと思っておりますので、我々もこれからいろいろ情報集めたり、今後そういった研究機関やあるいは業者さんとかも機会がある都度そういったことについて、いろいろ検討は重ねていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

○委員（三澤公雄君） もう一個。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 餌をいろいろ検討するっていう中で、最後にちょっと手前味噌だから言いづらかったんだけど、どこかのサーモンが脱脂粉乳、脱糞を使ったっていうね。これこそ八雲がやってくれたらなあってちょっと思ったりもしたんです。脱糞在庫っていうのは乳業業界では、一番はけなくて困っているものなんです。もしこれが上手に魚が食べてくれば、牛乳とサーモンがくっいたら八雲にびったりだなというイメージを持ったんですが、言いづらかったので最後に。是非研究してください。

○委員（関口正博君） 最後にいいですか。

○副委員長（牧野 仁君） 関口君。

○委員（関口正博君） そもそも熊石人的資源に限られるので、その結果がこのあわびにしたってそうですし、なのにまた北海道初、町長好きだからね、そういうのね。

でも、人的支援に限られるというのは十分考慮に入れたうえで、課長の頭の中ではいろいろ描けるだろうし、町長の頭の中でもいろいろ描けるんだろうけれども、結局人がいなくて事業がとん挫していくというのは、やっぱり行政としてしっかり考えなきゃならないとこだし、やってくれと言われりゃこの人達はやるんだろうけれども、二海サーモン合同会社ですから平均年齢は相当高いですから。

この後の人材を探すためにこの事業を確立させるサーモン。この主眼だけはしっかりと忘れないでいただきたいですし、あれもこれもやって、何もかも駄目になりましたっていうなら本当に笑いものですよ。どうかそこだけ肝に銘じてやっていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

○副委員長（牧野 仁君） 答弁はよろしいですか。

○委員（関口正博君） いいです。

○副委員長（牧野 仁君） ほかに。

○委員（大久保建一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保さん。

○委員（大久保建一君） なんかいいろいろ言われていましたけれども、現状をちょっと聞きたいんですが、北大水産学部の施設について八雲町から依頼をできる状況にあるのか、それともあそこがこういう学術研究をやりたいからこういうのをさせてくれるっていうことの一方向通行なのか、現状はどうなっているんでしょうか。

○産業課長（佐々木直樹君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） はい、どうぞ。

○産業課長（佐々木直樹君） 一応、研究と産業課所管ということで私のほうからお答えさせていただきます。

一方通行ということではなくて、町からこういうのを研究をしてほしいとか、こういう案件どうだって話もちろんできる環境にはありますが、さっきの先生の話に戻るようになるかもしれませんが、今そういう事案に詳しい先生がいないとか、そういったことで相談しても乗ってもらえないっていうか、なんていうんでしょう。そういうのに詳しい先生がいないっていうようなことはあると思います。

○委員（大久保健一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） あの施設をつくるときに、本来やっぱりウィンウィンの関係だからこそ作ったと思うんですよ。だから、その環境は一方通行、今現在でいけば一方通行なのであれば改善していかなきゃならないと思うんですよね。

だからこういうものを提案されてやるのもいいんだけど、やっぱり今の関係より一歩でも二歩でも前進して行って八雲町に実のあるものを作って研究してもらっていうことをしなければ本当にあそこにかけてお金が全く無駄になるので、その努力っていうか働きかけをしていくことが町としての仕事だと思うので、そこら辺を強く意識してほしいと思います。

○副委員長（牧野 仁君） ほかにございませんか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 千葉議長。

○議長（千葉 隆君） 岩内町に我々も視察に行ってあそこも研究施設というか、今までもいろんな研究していたんだけど、サーモン始めたらサーモンのこともしっかり研究してるんですよね。何年生きるんだろうとか、淡水でとか。

だから、海では何年生きるんだろうとか、何メートルまで大きくなるんだろうかとか、それからどれくらいの脂がつくんだろうとか。そうやって過当競争に生きるためにサーモンに特化して勝負するんであれば、そういう研究施設が一番望ましいはずなんですけども、実態としてサーモンと連携した研究所になってない。

ただ、9千万円かけて建物をつくりました。1千万円くらいで毎年やっていた。10年で2億、3年で3億かける。だから、過当競争で主力で頑張るんだってところと、連携する部分が強くないとやっぱり議会としても心配なところがあるんですよっていう部分を皆さん言ってると思うんですよね。相対で。

だから、何もイトウやるのが駄目だとかダルスが駄目だとか、そういうこともあってもいいし、若干あわびの部分をやったりするのがあるけれども、今何を中心に、今何が必要なのかっていうところにやっぱり直結した研究所になってほしいというか後押しする。

そのために施設を建てて、あるいは今人材もいるんだろうから、そこにやってもらわないと、本当にどこの町もいろいろやってるんだから、例えば先ほど岩内でもやってるけれども、やっぱり岩内だって生き残るために研究してると思う。

だからそういうのをほかのところでも日本ファームさんは日本ファームさんでね。小ベースでいろいろ研究してるけれども、自治体としてはまさに援護射撃するにはそういうと

ころが一番重要なと思うので、やっぱり北大でどうのこうのっていう部分があるんであれば違う大学ともやってもいいだろうし。逆にね。北大だけではなくて。

強いところとサーモンの養殖の、これからなにがブランド化していかないとならないかって部分も含めてやっぱり研究。そのための調査をしていかないと、勝ち残れないんじゃないかってさ。やっぱり我々は費用対効果ということが一番に、特にこういう研究分野も時間かかるけれども、ゼロだったら困るんだよね。一定程度そういう成果っていうか費用対効果の部分が見えるようなかたちにしていくっていうか、結びつけられるような部分がなければなんのために町が運営費出してるかっていう部分がイコールフィットしてこないんで、ちょっと今の状況だったらあまり効果っていうかそこにサーモンに一生懸命やっている連動しているような姿が見えないので、そのところを頑張ってもらおうような状況をつくっていかないと、結局、ダルスが駄目ならイトウにいったらいいわけだ。

ダルスどうしたのって言われたら困るわけだ、我々だって。それで、ダルスするときにも言ったんだわ、こんな部分で商売にならないよって。単価やすいものだと。イトウの場合は単価高いけれども、かなり前に俺もなんだかって鯖●●っていう町に行ってきたんだよね。

あそこもイトウって白い魚だから、結局餌で赤みを付けて販売してるわけさ。だけれどもあまり売れ先がないから爆発的に需要と供給の関係でいかないんだよね、今のところね。物も作れないから需要と供給の大きさが膨らまない部分があるけれども、そこがイトウも弱いと思うんだわ。

だからそういった部分も少しずつ頑張るのはいいけれども、やっぱりサーモンで勝負するんであればサーモンと関わりを少し研究して成果見せてもらえわないと、逆に言ったらこの研究施設自体、一定程度来たらやっぱり再評価っていうか評価しなきゃならない時期が来ると思うんだよね、成果を見せない。今のところはあまり見えてないから、少しそのところ強化してほしいなって、希望だけね。答弁はいいです。

○水産課長（吉田一久君） 委員長、水産課長。

○副委員長（牧野 仁君） 水産課長。

○水産課長（吉田一久君） おっしゃるとおりのことかと思えます。

北大の今の実験施設では、過去に今のサーモン種苗の長期育成試験というものも実施してきました、成果としては途中7月8月になると水温調整しても死んじゃうという結果も出ていたりしていました。

それでありますが、今後あちらの施設を活用して今議長さんがおっしゃるような今の二海サーモンの付加価値向上へ向けたなんらかの取り組み、そういったものについてできなかっていうこともこちらのほうから担当の教授さんのほうにも投げかけまして、いろいろとサーモンについてもできるところの取り組みが必要なのかなというふうに考えてございます。

○副委員長（牧野 仁君） よろしいですか。

では、これでイトウ養殖試験について終わります。

○4番（大久保健一君） 課長は、イトウ食べたの。

○水産課長（吉田一久君） 食べました。

○4番（大久保健一君） 美味しい。

○水産課長（吉田一久君） 思ってたよりは、食べれました。

ごめんなさい、イトウに対して失礼かもわかんないですけど。

○4番（大久保健一君） それは何、刺身。

○水産課長（吉田一久君） 刺身、あとスモーク。手握りで食べたど、かきたさんで。

○5番（関口正博君） 鮭なの。

○水産課長（吉田一久君） 食べた風味は、やっぱり鮭科の風味でした。

○4番（大久保健一君） 二海サーモンと比べて美味しかった。

○水産課長（吉田一久君） 僕は、二海サーモンのほうが美味かったです。

脂の乗りが二海サーモンほどではないので。なので、二海サーモンの脂が濃いつていう人は、むしろイトウのほうが良いかなつていう意見もありました。

○8番（三澤公雄君） あつさりして。

○5番（関口正博君） 海面やることによつて脂がまた増してくるつてことはあるだろうけどね。

○水産課長（吉田一久君） それで、僕釣りやるんで、釣り仲間から聞いたイトウの評価は必ずしも高くないんですよね。淡水で獲つたりとか、そんな美味しい魚じゃないつて。

○5番（関口正博君） いつも言うように、今度イトウの餌やりは産業課長がやんなきゃならなくなるんだから。そこは、自分たちの首締まるんだから。

○水産課長（吉田一久君） 今、一緒の生け簀に入れてもらうことで産業的にあんまり変わらないんですよ。合同会社の方にも、そういう中でならできるよつてことなので、合同会社も実際イトウが多分サーモンと同じような取引だと値段はつかないし買い手もつかないでしょうから、多分特別なところに売つていくつていうことになるんでしょつけれども。

将来的に本当に育つてその値段がついて、実際食べても美味しいよつて自信もつて出せるものであれば、自分たちのプラスになるんだつていうことで、今回協力しましょつていう話になつたので、ただ、実際どうなんでしょうね。

本当に海で海面養殖でやつたことは今までないので、本当に育つかどうかも陸上の水槽では、サーモンと一緒に育ててちゃんと十分成長するのはわかつたんですけども、あの大きな生け簀の中で多分上のほうにサーモンがいて、下にイトウがいると思うんですけども。

○8番（三澤公雄君） 一緒つて混ざつてるつてことなの。

○水産課長（吉田一久君） 混ぜて育ててます。

○8番（三澤公雄君） 共食いしねえの。イトウのほうが勝つんでないの、違つうの。

○水産課長（吉田一久君） 多分大きさに相当差があれば、あり得ますけれども。ですから、種苗が予定どおり400~500までおがるのかつていうのがそのフェーズ2の段階なんですよね。それによつて、フェーズ3に移るときに考え方をまた変えなきゃならないかもわかつらないですけども。

今、本職であれば今の合同会社の方々は普段やること、特別ななら作業的に変えることはないので、一緒に買えますねつていうことなので、協力してくれることになつたんですけども。改めて生け簀を準備して、そこに入れるとなつるとちよつとまた考え方も変わつてくるので。

○5 番（関口正博君） 研究としては価値があるけど、八雲町としてはなんのメリットもないような気がするな。だから北大でやれっていうことになるんだよ。

○水産課長（吉田一久君） ただ、このイトウ自体がね、今後どのように育つのかっていうのはまだちょっとわからないのでね。

○4 番（大久保建一君） 化けるかもわからないよね。

○水産課長（吉田一久君） 未知数なことがあるので、このイトウの実験について1つの町で完結できるって言ったら、今八雲町でしかないというふうに思うので、ここは●●さんの意向もそうですけれども、我々も将来に期待して、一緒にやりますかっていう感じになったものですから。

○4 番（大久保建一君） イトウとトラウトサーモンのハイブリッドだよな。

トラウトって凶暴だからね。

○水産課長（吉田一久君） ただ、ハイブリッドできるかどうか。自然界の関係性の中でもニジマスとなんかは混ざるけど、同じサケマスは混ざんないとか、生まれても成長しないっていうやつがあるんで、ちょっと詳しくはわかんないですけど、将来も含めて。

○4 番（大久保建一君） たいした美味くないってことね。

○水産課長（吉田一久君） 僕は、サーモンのほうが好きだった。

○8 番（三澤公雄君） イトウのほうがおいしいって言ってる人っていましたか。

○水産課長（吉田一久君） もちろん。脂がね、サーモンほどないんで、そっちのほうが食べやすいって、おいしいって言う人ももちろんいました。

○水産課長補佐（多田玲央奈君） 海水で育てたイトウを食べました、そのときは。

○5 番（関口正博君） ほんと。それは、脂それなりに出てくるの。

○水産課長（吉田一久君） 脂はそれなりにあります。やっぱりサケの刺身というか、サケマス類の刺身だなんて、独特の風味があるじゃないですか。あれと一緒にです。ただ、身の色があんまりのらない。

○4 番（大久保建一君） 白いの。

○水産課長（吉田一久君） ちょっと白っぽい。

○5 番（関口正博君） なるほどね。

○議長（千葉 隆君） 餌で色付けるから。

○4 番（大久保建一君） わかりました。

○議長（千葉 隆君） 案外白いんだもん、自然の。白身魚だから。

○6 番（宮本雅晴君） イトウはな。

○4 番（大久保建一君） エビかなんか食うの。

○8 番（三澤公雄君） エビカニ食わなきゃね。バツタでもきつと赤くなるよ。イナゴ火通したら赤くなるもな。

【産業課・水産課職員退室】

【農林課職員入室】

○副委員長（牧野 仁君） それでは、四番目の醸造用のぶどうの栽培状況及び今後の予定について農林課から説明をお願いいたします。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○副委員長（牧野 仁君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） それでは平成 30 年度から取り組みを進めております、醸造用ぶどうについて、その栽培状況及び今後の予定について農業振興係長よりご説明申し上げます。

○農業振興係長（高嶋一登君） 委員長、農業振興係長。

○副委員長（牧野 仁君） 農業振興係長。

○農業振興係長（高嶋一登君） それでは、まず始めに令和 6 年度の栽培結果について申し上げます。

わらび野地区及び上の湯地区につきましては、令和 3 年から 5 年にかけて定植したヤマソービニオンが、両地区あわせて 278 kg 収穫され、果汁糖度は平均 22.3% に達する結果となりました。また、令和 6 年度から栽培を開始した三杉町地区においては栽培面積 20 アール、白ワイン用品種のシャルドネの苗木 600 本の定植を行いました。

次に、成果の内容について申し上げます。

令和 6 年度のぶどうの生育状況は、春から秋にかけて気温の高い状態が続いたことや栽培に従事する地域おこし協力隊が苗木の状態を見ながら、新しい芽や枝のせん定、ワイヤーへの固定などにより、生育を制御した結果、果実品質が向上し、収穫量の増加が図られました。

先ほども申し上げましたが収穫したぶどうの果汁糖度は、成熟に伴い増加し、完熟期には平均 22.3% に達しました。収穫したぶどうは、現在民間ワイナリーに醸造を依頼しており、750ml ボトルで約 200 本のワインが出来上がる予定となっております。

三杉町地区に定植したシャルドネにつきましては、除草剤による防除や刈払機での株元の除草に努め、健全な樹幹の育成が図られています。

また、農福連携につながる取組として、放課後等デイサービス事業所に通う児童に参加いただき、植樹体験を行いました。

次に、今後の予定ですが三杉町地区における今後の栽培計画につきましては、令和 7 年度は栽培面積を 50 アール拡大し、シャルドネを 1,500 本、令和 8 年度から令和 12 年度にかけては、栽培面積を毎年 70 アールずつ増加させ、欧州系ぶどう品種を 2,000 本ずつ植樹していく計画としております。

全地区における生産計画につきましては、引き続き、栽培技術及び品質の向上に取り組み、令和 7 年度には収穫量 600 kg、480 本の製品化を見込み、以降記載のと通りの収穫量、生産を見込んでおります。ワイナリー設立構想につきましては、令和 8 年度に基本構想の策定、令和 9 年度から令和 12 年度にかけて、施設の実施設計、建設工事、稼働を目指したいと考えているところであります。

次に、資料裏面になります。三杉町地区の栽培圃場位置につきましては、令和 12 年度まで写真図のとおり植樹する計画としております。

栽培管理につきましては、地域おこし協力隊任期満了後に起業を目指す2名が中心となり、土壌や生育ステージの実態に合わせた肥培管理を行うとともに、民間ワイナリーからの指導や助言をいただきながら、栽培・醸造技術及びマーケティングを中心とした経営力のレベルアップにつながる研修を通じ、栽培管理方法の習得や技術研鑽に努めてまいります。また、三杉町地区では、今後、市場評価の高い欧州系ぶどう品種を植樹し、ブランド製品の研究を行いながら、産地ブランド化を目指すこととしたいと考えております。

最後に、醸造計画につきましては、自治体で酒類販売業免許を取得できないことから、令和5年度から民間ワイナリーに醸造を依頼し、試作ワインを製造してきたところであり、令和6年度も同様、販売を行わず試作ワインとして取扱うこととしております。

以上、簡単ではありますが醸造用ぶどう栽培状況及び、今後の予定についての報告とさせていただきます。

○副委員長（牧野 仁君） ありがとうございます。

ただいま醸造用のぶどう栽培状況について、今後の予定について説明がありました。皆さんからこれについて質問等ございませんでしょうか。

○委員（大久保健一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） 順調にいつてるからこれだけ柵付け面積どんどん大きくして行くんでしょうけれども、最初は町長の戯言だったのかな。八雲町でワインを作りたいって。これだけの規模になってどんどんやっていって、令和9年に基本構想を策定するってことなんだけれども、今の段階でいけば町としたらどういう終着点を目指しているんですか。

ワイナリーを作ってあげて、それを今やっている人たちにあげるってことなの。それとも、入札してやってもらう業者を募集するのか、ちょっと終着点が見えな過ぎて、どういうふうに思い描いているんでしょうか。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○副委員長（牧野 仁君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） 醸造用ワインぶどうについては、平成30年度から取り組みを始めておりまして、新たな農産物や物産による産業振興や観光資源の創出、町のブランドの向上を図ることを目的に開始したものでございます。

令和5年度から協力隊2名を採用して事業を推進してきておりまして、ワイナリーについては令和8年度に基本構想を策定をする予定としてございます。その後、実施計画や建築工事を経て令和12年度までに稼働することを予定しておりますが、そのワイナリーの運営につきましては、今のところ公設民営ということで建設については町が補助金等を活用して建設をしまして、その後指定管理を行って運営をしてまいりたいというふうに考えてございます。その町民にとって、町民の生活の中に楽しみだとか身近にワイナリーがあることによって、なにかしら優位性を実感できるような展開をしてまいりたいというふうに考えてございます。

○委員（大久保健一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保さん。

○委員(大久保建一君) 公設民営って結構好きですよ、八雲町って。どうなんだろうな、いろいろ首をかしげたくなるっていうか俺の感想ね、個人的に思うのは青年舎なんかでいったら八雲の主産業である酪農を守っていくとか、育成はできてないけれども、後継者を作っていくとかってということだろうけれども、ワインについては果たして町がやるべき公共性って見いだせるのかなって、そこがすごく疑問に思ってるんだけど、その辺は担当課としてどう考えていますか。

○農林課長(石坂浩太郎君) 委員長、農林課長。

○副委員長(牧野 仁君) 農林課長。

○農林課長(石坂浩太郎君) ワイン事業をはじめたいきさつは先ほどご説明したとおり、様々な産業振興、観光振興につなげたいという思いで始めてございます。それでこの事業展開することの意味とかメリットを考えたときに、たとえばその新たな特産品を創出したり、たとえば果樹産業、今まで八雲は日照時間も少ないし、●●だったということで果樹の栽培に適していないと言われていたんですが、果樹産業の先になる取り組みになるのかなとも思っています。

また、福祉分野との連携、今年三杉町の畑に●●するときも放課後デイサービスの方に植樹体験してもらいましたが、そういった障がい者との交流の場だとか、小中学生、教育機関との連携も図れるというふうに考えてございます。

ワイナリーができることによって、観光客の流入も期待できるといった様々な面から町としてやる意味のある事業だということでこれまで推進してきてるところでございます。

○委員(三澤公雄君) はい。

○副委員長(牧野 仁君) 三澤さんどうぞ。

○委員(三澤公雄君) 今、課長がおっしゃったように、今まで八雲のこの栽培する農業っていうのは、種まいてその年に収穫するものしかイメージできなかったのは果樹っていう、長期視点立たないといけないんだけど、全く新しいものができる可能性を気付かせてくれたって意味で非常に魅力を感じています。

それでこれについてくる、要するにじゃあうちもぶどうを生産してみようかだとか、あとそれ以外の果樹だって可能性はあります。我が家にもキウイになるんですよ。びっくりしちゃったんだけど。それくらい八雲の気温は果樹に向いてきているなど。だから、ほかの農家にも刺激があるし、新しい取り組みというのは人を呼び込むって意味でも魅力的だと思うので、それにもう一つ決定的に違うのは確かに先ほど誰か言ったけれども、町長の思い付きだったかもしれませんが、しっかりと志をもって技術の研鑽に全くそれを高めることにすごく積極的な若者二人がいると。

今すでに道内の先進地へ赴いて醸造の勉強も始めている、実際に八雲のぶどうで醸造もしているっていうそんな若者が来てくれたぶどうですから、もっと大事に育てていきたいなと思って聞いていました。

公設民営っていうのは、佐藤議員なんか企業が誘致のことで批判していますが、今どこの町でも企業誘致っていうのは、ある程度基盤整備も含めて自治体が準備して、そこに手を挙げてた企業が入っていくって、それから考えたら公設民営での企業誘致は別に僕は違和感

は覚えません。やる気のある若者がいるわけですから、負担のないように暖かく育てていく体制は作っていくべきかなと思って聞いていました。頑張ってください。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口委員。

○委員（関口正博君） 一番健全なのは民設民営ですよね、これは紛うことなく事実です。土地を提供して建物を建てて。

○委員（三澤公雄君） 徳川さんが私費で開いていった町だぞ。

○委員（関口正博君） だけど、一生懸命やっているのはわかるんだけど、そこら辺どれくらいのお金がかかって、どのような効果を生むのかというのは徹底的に検証しないと。それだけの投資になるんですよ、おそらく。土地も無償提供ですから。それが観光、そして将来の産業振興、どの程度効果があるのかっていうのは早急にお示ししていただきたいというふうに思います。すごく魅力のある二人だということはわかるんだけど、その二人のためにどれほどのお金が使われるのかは●●と思います。公設民営一時期流行ってそれがなくなった。それは効果がなくて民設民営だよなって、それでまた公設民営ってかたちが増えてきた。これは人がいなくなったからですよ。これは同じこと繰り返してるんです。一番健全なのは民設民営だっていうのは、ちゃんとわかっていたほうがいいのかなと思いますし、やられる方もそういう意識のもとでやっていただかないと、なかなか事業というのはいまよくいかないのかなって僕自身は思うんですよ。

ただ早急に効果的なものは示していただきたいなと思いますので、決して否定的な意見ではなくて、ちゃんと見なきゃならないものですから、そこら辺はお願いしたいと思います。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○副委員長（牧野 仁君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） 皆様、各委員からいただいた意見はそのとおりだと思います。

全道で、たとえばうちと同じように協力隊を採用してワイナリーを運営、法人を立ち上げて運営しているっていうところが弟子屈町で去年の8月に、それこそ公設民営でワイナリーをオープンした事例がございます。

そういった先進事例等を確認しながら8年度基本構想策定しますが、それまでの間にその先進事例などを参考にしながらそういった事業効果、事業計画、収支計画については基本構想へ向けて概要をまとめてまいりたいと考えてございますので、よろしく願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） ほかに。

○議長（千葉 隆君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 千葉議長。

○議長（千葉 隆君） 平成30年から始まって、こういう資料出すときに基本構想までに毎年このぶどうにいくらずつ出してきたのかっていうのをね、平成30年には借地代いくらだとか民間に種苗料払っていたとか、それもちよっと悪かったような気がしてならないんだよね。

それで、そのところが逆に多くの町民を無駄に見えている部分もあったんだわ。でもそういうのも包み隠さずこれくらい積み重ねてきてるって部分も毎回出してきて、それで今

いくらでこれから構想ですよっていうようにやっていかないと、我々も説明ができないんだわ。進めるうえで。結局過去のこともきちんと説明しないとなかなか理解が得られない部分があるので、単年度ではもらってるんだけど、俺たち忘れちゃうから、そういうのも出しておいて。

それで、もう一つは、ここまでぶどうを植えるわけだから、今協力隊の人が任期があるから、その人たちがこの間指定管理されるまでの間どうなるのかなって。やっぱり三澤さんじゃないけれども、関口議員さんも一生懸命頑張ってるって。ここにいるから言いづらいのかもしれないけれども一番重要なことだと思うんだ。

本人たちだって一番不安だしさ。その辺どういうふうと考えて、どういうふうにとどの程度のまさか今まで同じ頑張ってきて、このくらいの給料が下がるだとかやる気が失せるだろうし、それ以上に多くなれば多くなるほど、多く仕事をするわけだから普通。何倍にもするんでしょ、これ。今からしたらさ。

そして、前のところにも東野だとかあっちまで行かなきゃなんないんですよ、距離。その辺もやめたほうがいいんじゃないかなと思うんだよね。●●周知して不効率な部分は不効率な部分で、やっぱり移植してもくるだとか考えたほうが限られた人数の中でやるのであればそういうことも大胆にしていかないと過去は過去として試験やったんだけど、やっぱり良くするためには不効率だとか毎日行っていないと思うけれども、何日かあその上の湯とかわらびのだよ。そこと三杉町ですよ。他所の町に行くようなものだってわけではないけれども。本州に行ったらだよ。

八雲町は大きいから同じ町内だけれども、そういう部分もしっかりと集約する中で将来ワイナリーを建設する構想もいいんだけど、現状の部分も改善していかないと、駄目かなと思うので、だからそういうのをやらないで、ただ構想作りますよって行って無駄なところが残るのもどうなのかなって気がしてならないので、そういうところもどういうふうを考えてるんですか。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○副委員長（牧野 仁君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） まず協力隊の処遇についてでございますが、協力隊の任期については令和7年度で3年間が終了するというところでございます。その終了後については、協力隊で法人の立ち上げを検討をしております。また、ワインの生産本数がだいぶ増えてきてございますので、自治体では酒販免許が不足ができないってことから立ち上げた法人で酒販免許を取得することも今検討をしているところです。

それでその町が立ち上げた法人に対して、8年度以降についてはぶどうの栽培管理を委託することを検討をしております。当然、委託料をお支払いしたうえで管理を委託するってことを予定しています。

また、圃場の分散については、現在わらびのと上の湯に補助が三杉町以外にございますが、こちらについては当時から圃場を管理していただいている農業者の方もおりますので、その方々と十分協議していきたいというふうに考えてございます。

○議長（千葉 隆君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 千葉議長。

○議長（千葉 隆君） 委託料の設定が民間の販売も含めて、自治体では直接的にできないということからそういうことをやると思うんだけど、委託料の設定って難しいですよ。やっぱりこれだけの部分をたとえば平成ずっときてき、量が多くなるのに委託料が同じなのかっていったらおかしい話になるし、けども少ないのに一定程度確保しないとならないって委託料の積算根拠やってきたら難しいだろうし、要は委託料だから管理委託料で●●やりますよっていったら、何㎡の何本やるから委託するわけだ。

そしたら、本来であれば毎年増えたら多くやらないとない。けども最低限二人や三人なりがそこで管理をする、人工は人工でいくんだろうけれども。そういう人工で計算するのかなのかっていう部分は、やったら逆に言ったら最初のときにその人工でいらんじやないかって話になるでしょ。三倍四倍になったら。

だから設定って難しいと思うんだよね。それと指定管理者の部分を本当に指定管理する部分に単独で指定をするのか、公募で選ぶかとかもいっぱいハードルがあると思うので、その辺含めて町民の人たちが理解できる環境を作っていかないと駄目だと思うので、そういう課題へ向けて努力してほしいなと思いますので、よろしく願いいたします。

○農林課長（石坂浩太郎君） 委員長、農林課長。

○副委員長（牧野 仁君） 農林課長。

○農林課長（石坂浩太郎君） 千葉議長ご質問のことを重々肝に銘じながら、今後、検討してまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） ほかにございませんか。

（「なし」という声あり）

○副委員長（牧野 仁君） なければ、これで終わりたいと思います。

【農林課職員退室】

【商工観光労政課職員入室】

○副委員長（牧野 仁君） それでは次に五番目ですが、物価高騰対応プレミアム商品券令和5年度から6年度の結果報告について、商工観光労政課から報告よろしく願いいたします。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） 委員長、商工観光係主査。

○副委員長（牧野 仁君） 商工観光係主査。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） それでは、私から報告事項として、1物価高騰対応プレミアム商品券令和5年から令和6年実施分の結果報告をさせていただきます。

報告事項の裏面をご覧ください。こちらは、1月の本委員会でも報告をさせていただきました内容を可視化したものです。

目的としましては記載のとおり、プレミアム率 30%の商品券を発行し、町内の消費喚起を図る目的で発行したものです。

当初販売予定2万セット26万枚に対して、実販売数1万9,992セット25万9,896枚の販売で、申し込み多数となったことから1人当たり上限を9セットとしました。

商品券の実使用枚数は25万9,315枚のうち共通券が11万9,816枚、限定券は13万9,499枚。使用率は99.8%となりました。

中段のグラフ左側をご覧ください。記載のとおり全体の32.9%、8,529万7千円が大型店、中小規模店は67.1%、1億7,401万8千円となりました。中小規模店の内訳ですが、先にお伝えした内容に誤りがあり、正しくは生活関連・日用品21.0%、食料品が13.3%、建設自動車は12.8%、多かった順には変更はありません。

また、右のグラフについては共通券だけに着目した状況であり、11万9,816枚のうち71.2%が大型店、中小規模店では28.8%、3,451万9千円の使用となり、共通券では生活関連、建設・自動車・熊石の順となりました。

最後に総括となりますが、申請事業者は特に商工会員や大型店除外などの制限を設けず、227事業者による申請となり、令和3年実施のいきいき商品券程度の事業者となりました。

また、大型店の使用割合は全体で32.9%とわくわく応援券と比較すると中小規模店で多く使用されました。

また、前回わくわく商品券の使用率は99.4%でしたが、今回は99.8%と本商品券の方が使用率が高かったことがわかりました。このことから町内経済の循環が一定以上あったと判断しております。

以上、大変簡単ではございますが、令和5年から6年度商品券発行事業の報告を終わらせていただきます。よろしくお願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） ただいまご説明のありました、商品券の結果報告について、これについて皆さんからご質問等はございませんか。ありませんね。これで終わります。

【商工観光労政課職員退室】

【地域振興課職員・住民サービス課職員入室】

○副委員長（牧野 仁君） それでは順番が変わります。八番目の熊石地区関係人口創出拡大事業について、地域振興課、住民サービス課から説明をお願いいたします。

○地域振興課長（田村春夫君） 委員長、地域振興課長。

○副委員長（牧野 仁君） 地域振興課長。

○地域振興課長（田村春夫君） それでは、私のほうから熊石地域関係人口創出・拡大事業について説明したいと思います。

これまで常任委員会で報告しておりますが、昨年5月の総務経済常任委員会、第2回定例会、9月の文教厚生常任委員会での保育園留学の受入れ事業について報告しております。

第2回定例会では、議員皆様のご理解により、関係人口創出拡大事業へ向け、保育園留学のための委託料825万円と、活動拠点施設として旧すまいる熊石などの改修実施設計業務委託料212万3千円の補正予算の議決をいただいたところであります。

施設改修については実施設計がまとも次第補正予算、改修工事に取り組む予定でございましたが、この間、9月の常任委員会で報告したとおり、保育園留学の委託先として予定していた事業者より熊石地域での実施は厳しいとの連絡があり、この事業者からの受入れは中止したものであります。

また、施設改修費について実施設計がまとまり、旧すまいる熊石の改修費が約1億3千万円程度、旧熊校公宅の改修費が約500万円程度となっております。

旧すまいる熊石の改修費が1億円を超える金額となった要因としては、電気設備でキュービクルが必要で電気設備に約3,300万、エアコンなどの機械設備に3,300万となったものです。

旧熊高公宅の改修については、凍結により使用不能となった給湯器や、洗面化粧台、洗濯用水抜栓、浴室シャワー混合栓など台所や水回りの部分が殆どとなっております。

この実施設計の結果を踏まえ、このまま進めることは難しいと考えますが、急速な高齢化、若者・子どもの減少している熊石地域の現状を見ますと、少しでも早い事業実施が求められます。そのため、旧熊高公宅を活用し事業を先に実施し、その後、旧すまいる熊石の活用についても検討したいというふうに考えております。

資料1をご覧ください。

関係人口の拡大による人材確保に向けた取り組みについて、これまでも説明してきておりますが、旧すまいる熊石を使用する部分を一線で見え消ししてあります。ただし、くまこう館等でできる部分については、そのままとし、たとえばワーケーションや親子体験事業、インターンシップの受け入れなどまた地域交流イベント等についてはそのまま実施したいというふうに考えています。

資料1の2をお願いします。事業スケジュールであります、下段のくまこう館の整備ついて、改修費については約500万円程度、それと中に入れるテレビ・冷蔵庫・洗濯機などの備品整備費が440万円程度と見込んでおりますが、たとえば指定管理者へ委託し改修や備品を整備することにより費用を抑えられないかなど、今後少し検討したいと考えています。それと合わせて、指定管理期間、指定管理委託料を決めたいと考えています。

指定管理者につきましては、これまでも説明してきておりますが、これまで熊石地域の課題解決に向け、一緒に取り組んできましたBコネクトへ委託したいと考えております。

今後の予定ですが、施設改修方法などをとりまとめ次第、再度、総務経済常任委員会へ報告し、6月第2回定例会へ関係予算及び指定管理について上程し、改修後7月下旬くらいから施設の運用を進めたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

○副委員長（牧野 仁君） ありがとうございます。

ただいま熊石地区人口創出拡大について説明が終わりました。これについて、皆さんからご質問等はございませんでしょうか。

（「なし」という声あり）

○副委員長（牧野 仁君） なければ、この程度にして終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

【地域振興課職員・住民サービス課職員退室】

○副委員長（牧野 仁君） あと2点ほどあるんですけども、もうお昼になるので、午後から二点ほど六番、七番の審議に入りたいと思うので、よろしく願いいたします。

<<休憩>>

<<再開>>

【危機対策課職員入室】

○副委員長（牧野 仁君） それでは、揃いましたので始めたいと思います。

今日の六番目、新しい地方経済生活環境創成交付金、防災緊急整備型の活用について、危機対策課より説明をお願いいたします。

○危機対策課長（田中智貴君） 委員長、危機対策課長。

○副委員長（牧野 仁君） 危機対策課長。

○危機対策課長（田中智貴君） それでは、危機対策課の報告事項であります、新しい地方経済・生活環境創成交付金地域防災緊急整備型の活用についてを担当より報告させていただきます。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） 危機対策課の横木です。よろしくをお願いいたします。

私から、新しい地方経済・生活環境創成交付金地域防災緊急整備型の活用について説明させていただきます。

お手元に事前に配布している事業概要から簡単にご説明させていただきますので、別紙1をお開きください。

昨年末の12月17日に成立した、国の令和6年度補正予算において、避難所の生活環境改善をはじめ、防災・減災に必要な車両や資機材につきまして、住民の防災意識の浸透等に向けた平時の利活用も含めたかたちで自治体の整備を支援する、新しい地方経済・生活環境創成交付金地域防災緊急整備型が創設されました。

今回の交付金につきまして、能登半島地震などの過去の災害を教訓としまして、避難所の生活環境の改善を図るべく、トイレ、キッチン、ベットなどいわゆるTKBの早期配置を目指すものでございまして、トイレカー、トイレトレーラー、簡易トイレ、キッチンカー、パーテーション、簡易ベットなどの資機材が対象経費となっております。

補助率につきましても、国庫補助が2分の1、残りが地方負担分についてございまして、あわせて実質的な自治体の持ち出しは全体事業費の1割程度という、財政的に非常に有利な交付金となっております。

対象経費とならない消耗品などについても、例年通り令和7年度当初予算への計上を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

なお、国の総額予算の範囲内での交付となるため、ほかの自治体との兼ね合いにより採択されない可能性もございしますが、避難所の生活環境の抜本的な整備も喫緊の課題と考えておりますので、引き続き災害備蓄品を整備していくところでございます。

申請する備蓄品については、感染症対策やプライバシーの確保のためのワンタッチパーテーションを113張508万円、ジェットヒーターやストーブなどの暖房や、照明や通信環境の確保のための発電機を22台おおよそ607万円、災害時のトイレ対策として、マンホー

ルトイレにも対応可能な組み立て式トイレを20セット413万円、総事業費1,527万9千円を整備する予定であります。

発電機やジェットヒーター等の機材は1台あたりの単価も高価額であり、限られた財源の中で今回の交付金を活用し、さらに整備を進めてまいりたいと考えております。

今回の交付金で整備した備蓄品については、平時の活用による地域防災力の向上を求められていることから、町内会の訓練や防災リーダー研修等での活用のほか、地域防災イベント等を通じて、町民の皆様の手に触れていただけるような機会を設けたいと考えております。

以上、簡潔でございますが、新しい地方経済・生活環境創生交付金地域防災緊急整備型の活用についての説明となります。よろしくお願いたします。

○副委員長（牧野 仁君） 今事務局より地域防災緊急整備型の活用について説明を終わりました。これについて、皆さんからご質問等はございませんでしょうか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） マンホールトイレって表現したけれども、八雲でマンホールトイレが設置できる場所ってというのは、これから造る新庁舎はそういうことを想定して議会からあげているけれども、今の時点ではありますか。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） 現時点ではマンホールトイレは難しいかなと考えてございますので、今は凝固剤を使っているトイレを備蓄しているところでございます。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） でも今回組み立て式トイレはそういうことを考えて導入するっていうふうに理解しちゃったんだけど、逆に期待がトイレカーやトイレトレーラーを期待していたんだよね。

普段だって八雲の場合公衆トイレがないよっていう声もあるから、たとえばイメージとして遊ばせるのはもったいないからトイレトレーラーを導入しても各児童公園なんか定期的に移動させながら使って住民にとって身近に感じてもらうだとか、もしくはイベントのときに体育館やそばにおいてトイレの補充にするとかっていう使い方っていろいろできるから、今回そこになんでそれが入ってこなかったのかなっていうのが残念な気持ちが多いんだけど、どうなんですか。

なぜ、組み立て式トイレになったのかなってことで改めて聞きます。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） トイレカーとかは今検証も進めていますが、けん引免許の必要のないトイレカーも徐々に始めてきているので、そういった相場といたしましうか、そういったところも検討していますが、今回はマンホールトイレっていう表記もしていますが、

今後将来へ向かって汎用性の高いトイレを設置してまいりたいということで、今回の組み立て式トイレを整備させていただきました。

イベント等でキッチンカー、トイレカーですとか、そういったものも流動性が高いものと考えてございますので、今後の検討とさせていただけたらと思います。

○副委員長（牧野 仁君） ほかにございませんか。

○委員（大久保健一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保委員。

○委員（大久保健一君） これ見るとびっくりしたんだけど、すごい単価高いものなんですね。

たとえばパーティションだとかって、1張こんな簡素なテントみたいな4万5千円とかするんだね。これは防災用品というか防災メーカーのものしか駄目なんだろう。ずいぶん高いものなんだなって初めて驚いてるんだけど。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） 防災用品じゃないと駄目だってことではなく、一般的にアウトドア用品とかでも代替えは可能かなと思います。ただ、入札等すると単価はおおよそ3万円台くらいまで落ちるかなと思いますが、アウトドアの代替えも可能だと考えていますが、いかにせん避難所の設置するにあたって時間短縮っていう観点も求められるので、ワンタッチでこれは開くってパーティションですので、避難所設営の職員や住民の方々の負担軽減や時間短縮という兼ね合いもあってこのように設置させていただいているところです。

○委員（三澤公雄君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 三澤委員。

○委員（三澤公雄君） 今のワンタッチってことをちょっと。

落部小学校とかあそこで避難訓練されたあのサイズのものが、この写真に載ってるやつ。もっと大きいのかな。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） 落部支所とかで説明会させていただいたときと同じようなものとなります。

○委員（三澤公雄君） ひねりながらしまう。

○防災係長（横木潤也君） はい、そうです。

○委員（大久保健一君） その割には発電機安いよね。

（何か言う声あり）

○委員（大久保健一君） 3万じゃないんだ。

○委員（三澤公雄君） 発電機は、要するに点検も含めて毎年動かした方がいいっていうイメージがあるんだけど、共有してると思うんだけど、たとえば山車行列とか、ああいうときの発電機に貸し出しとかは考えていいのかな。

○防災係長（横木潤也君） それがこれです。

○委員（三澤公雄君） もうすでにやってるってことね。山車行列のときにわかってよかった。非常時で動かないと困るけどね。山車行列でよかったって感じで。

○委員（横田喜世志君） でも、ちゃんと●●ができないんだよね。

○委員（大久保健一君） TKB って最初からある言葉なの。

○防災係長（横木潤也君） 最近の主流になってきた言葉です。

○4番（大久保健一君） TKG は卵かけごはん。

○防災係長（横木潤也君） TKB とプラスW って言葉もあります。トイレ、キッチン、ベット、プラス、ウォーム、暖かさ。

○委員（三澤公雄君） ウォッシュレットのウォーム。

○委員（大久保健一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保委員。

○委員（大久保健一君） なんかの研修のときかな、言われたときに簡易ストーブのストックがすごく少ないって言われて驚いた記憶があるんだけど、今回こういうパーティションとかさ、そういうのは命に関わるものではなくて、どちらかというプライバシーを守る部分だと思うけれども、優先順位でいったらストーブとかそっちのほうが先だと思うんだけど、そこら辺はどういうふうに考えてるの。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） ストーブのほうは93台備蓄あるんですが、これは毎年10台ほど北海道の補助金を使いながら整備してきてるところです。こういった真冬、厳冬期にストーブやそういったものは命にかかわるものと考えてございますので、あわせて灯油や、灯油で8時間ほど燃焼するストーブでございますので、それとあわせて備蓄もしているところでもありますので、今回はトイレですとか、あと照明、電気の供給ということで単価の高いものを今回選定させていただきました。

○危機対策課長（田中智貴君） 委員長、危機対策課長。

○副委員長（牧野 仁君） 危機対策課長。

○危機対策課長（田中智貴君） 今回の交付金事業なんですけど、対象経費があらかじめ定められておまして、備品についても一機当たりの取得価格が10万円以上、それを下回るものは対象外という話であります。

そのほかに今回のパーティションとか、そういった特定の用途のあるものについては10万円以下でもオッケーというようなかたちでありますので、そういった意味合いも込めて選別させていただいたということでご理解いただけたらと思います。

○委員（大久保健一君） わかりました。

○副委員長（牧野 仁君） あと、ほかにございませぬね。

じゃあ次に入りたいと思います。七番目の八雲町津波避難計画改定案について説明をお願いいたします。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君）　続きまして、八雲町津波避難計画改定案につきまして説明いたします。

手元の資料、別紙２の八雲町津波避難計画修正概要および黒帯のものを中心に説明いたしますので、計画の骨子を説明いたします。

北海道が公表しました、太平洋側および日本海側の新たな津波浸水想定結果を踏まえて今回修正するほか、積雪寒冷地の課題等への対応を行いまして、平成 25 年度に本計画を策定されているものを改定するものでございます。

なお、八雲町全体を対象とした基本計画としておりますので、次年度以降に津波浸水が想定される地域を中心に津波防災訓練などで地域ごとの津波避難を検証していくことなどによって、実効性のある津波避難を検証してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

１ページ目と２ページ目を中心に、２修正内容を説明いたします。水色で着色しました箇所は、従来の計画から見直した項目で、緑色塗は新たに設けた項目を表しております。

水色に着色している箇所について、主に避難路や避難先の設定、避難方法などについて計画を改めております。

緑色で塗っている項目は今回新たに付け加えた項目でございまして、主に避難困難者の算出、避難誘導に従事する者の安全確保、積雪寒冷対策となっております。

３ページをお開き願います。津波浸水想定をもとに避難対象地域を見直ししています。八雲地域、熊石地域各々の区域図を掲載していますが、津波が 20 cm以上の浸水を予想される地域を朱色から黄色に着色している地域を避難対象地域としています。こちらは、２年前に作成しているハザードマップと同じ浸水想定区域です。

浸水想定面積や、最高津波水位、第一波到達時間はご記載のとおりですが第一波到達時間は日本海側が地震発生から約４分となっております。太平洋側より日本海側が顕著に短い時間での津波想定が特徴でございます。

４ページ目、避難路と避難先としまして、幅員のある道路を指定し、指定緊急避難場所までの避難路をお示ししております。地震の揺れによる土砂災害、雪崩などによる道路の寸断、JR の線路および踏切が下りていることによって常時遮断されてしまうことなどに留意しなければならない点だと今回の計画で地域住民などに周知することとしております。

５ページ目になります。避難対象地域と避難困難者数につきまして、最新の津波浸水想定をもとに避難困難地域を見直ししております。避難困難地域とは端的にいうと、津波の第一波到達時間までに浸水想定区域外に避難することが難しい地域と考えられ、避難場所まで遠い、または頑丈な高い建物などへの避難先が少ない地域であると捉えることができます。

八雲地域の例示としまして水色で網掛けしている、ちょっと見にくいかと思いますが八雲地域の拡大図のところ網掛けしている地域としてとらえていただけたらと思います。

富士見町や東雲町、東町、元町、豊河町などが該当してくると思います。八雲地域が約 6,100 人、熊石地域は約 900 人が避難困難地域に居住していることと試算しております。

避難困難地域ではより早く避難を開始することや、このあと口述します避難時の徒歩距離を見越した避難訓練などを実施することや、自動車避難の検討やルール決めを検証していくことが必要と考えてございます。

最新の津波浸水想定に基づき、津波が八雲沿岸や落部沿岸、熊石沿岸に襲来する様子をアニメーションで作成していますので、こちらをご覧くださいと思います。

こちらのパワーポイントのほうでお示いたしますので、よろしいですか。八雲地域はちょっと薄くて申し訳ありません、こちらが海岸沿いで航空自衛隊がこの辺りにあるかたちで、こちらが黒岩地域、山崎・花浦地域と考えて、こちらが浜松や山越地域となります。遊樂部川がここあたりにあって、八雲の市街地がこの辺にありますよってかたちになります。

この辺に八雲町役場がありまして、国立病院機構、新庁舎が建つあたりがこの辺りとなります。見にくくて大変申し訳ございません。

地震発生から経過時間というかたちになりますが、おおむね 68 分で津波が到達するので 50 分前後から兆位変動がみられるかたちになります。そういうかたちで動画を回させていただければと思います。

それでおおむねこれで地震発生から時間を早送りさせていただきます。ここが地震発生から 50 分経過して、徐々に潮がひいていくかたちとなります。ひいていきまして、おおむね 1 時間 10 分前後でこういったかたちで津波が来ます。色が変わっているところが津波と認識していただけたらと思います。

これで、おおむね八雲の浸水想定が最大になったあたりかなと思います。高速道路を境に高速道路付近まで山崎・花浦地域も浸水するかたちになりまして、立岩も八雲インターチェンジ付近まで浸水するかたちになります。市街地も JR の線路がこの辺にありますが、これも一部飛び越えて現庁舎の役場があるあたりも浸水する想定というかたちになります。

このあと動画を回させていただきまして、地震発生から 1 時間半程度が経っていますが、またこうやって第二波がやってくるというかたちとなります。

少し回ささせていただきますと、噴火湾という形状ですので、また帰ってきた津波が第三波としてこの辺で発生してしまうと。ですから、豊浦や室蘭から戻ってきた津波が何度も押し寄せるよということになってきますので、第一波が到達したからといって自宅に戻るのは非常に危険かなって多くのシミュレーションからみてとれるかなと思います。

続きまして、落部地区のほうを作っておりますのでご覧くださいと思います。こちらも落部地区になります。こちらが落部漁港になります。こちらが栄浜漁港で高速道路がこのようなかたちで通っております。国道 5 号線がこのようなかたちで通っています。落部支所がこのあたりです。これが落部小学校というような位置図になります。こちらの方面が野田生、東野方面でこちらが栄浜というかたちで認識していただけたらと思います。

こちらもおおむね 68 分後くらいに落部地域に到達想定で、少し早回しさせていただきます。ここで地震発生からおおむね 1 時間が経過したところでございます。兆位が変動しまして色が変わってきているところがございまして、おおむね栄浜地域には津波が到達しているということがシミュレーションで見いただけたらと思います。

おおむね落部市街地の災害の浸水想定かなと思います。長谷川水産の入沢工場付近まで津波が浸水して田んぼとかその辺まで浸水する想定でございます。落部市街地もおおむね高速道路付近まで避難していただくのが津波が浸水してくるかなというところでございます。

このようなかたちで、地震発生から1時間20分経過しても兆位の変動がみられるよというかたちとなります。

八雲地域でもみたように地震発生から2時間半経過しても何度も津波が襲ってくる兆位変動がみられるというところが落部地区、八雲地区も同様なかたちかなと思います。

最後に熊石地区になります。こちらは地震発生から4分後に津波が到達するという想定でございます。このあたりが旧くまいし高校の工程で鮎川地区、それで青少年旅行村、このあたりに熊石漁港がありまして、雲石、根崎町というかたちでございます。地震発生から2分到達している状況ですが、すぐに海面が変わるようなかたちとなりますので、ご覧いただけたらと思います。

地震発生からも4分で津波が到達するというかたちになります。おおむね地震発生から1時間たったんですが、津波もまだこの辺りに残っている形もございますし、何度も何度も兆位変動がみられるという状況でございますので、熊石地区も太平洋側と同様に第一波が到達したから安心というわけではなく、何度も何度も兆位変動がみられるのが特徴かなと思います。

(何か言う声あり)

○防災係長(横木潤也君) このようなアニメーションのほうも今回作成させていただいておりますので、議員のみならず町民の方々とかこういったかたちで津波が襲ってくる様子というのはビジュアル化しておりますので、実際の津波がどういったかたちで第一波、第二波が来るよっていうのもお目にかかることがあるかなと思いますので、今後周知していきたいと考えてございます。

動画のほうは以上になるので、資料6ページに戻りまして、このような津波から避難する方法としては6ページになりますが、原則ここ避難ということにしております。しかしながら、徒歩では津波から身を守ることができない場合は自動車の使用などの避難もやむを得ないと考えています。体調の悪い方や長距離の徒歩移動が難しい方、様々な事情のある住民がおられると思います。必要に応じて、自動車避難も含めた多様な手段による避難について検証していくことが肝要と考えてございます。自動車での避難も道路が損壊していないか、電柱の倒れこみや線路が遮断して通行に支障がないか、渋滞によって身動きができないなども考慮しなければならないと考えてございます。

それで、また線路を通行できない場合も含めた自動車シミュレーションというのも今回行っていますので、また動画というかたちになるんですが、ご覧いただけたらと思います。

こちらのほうにありますように、赤い丸が自動車をお示ししています。八雲市街地の中心で青い方々というのが徒歩避難であるですとか、津波の浸水想定区域外にいらっしゃる方と認識でお願いしたいと思います。少し拡大したいと思います。八雲市街地を中心にご覧いただけたらと思います。線路を通行できないということでおります。

大変見にくくて恐縮なんですけど、このあたりにJRの線路が走っています。JRが地震によって遮断機が下りている状況だと、自動車の避難しようとしている方々が役場前ですとかドコモショップの公民館辺りの踏切に一度行くんですが、遮断機が下りたままなので、折り返すかたちになっています。そういった方々は出雲通りや立岩の国道277号、日本ハムの工場のあるほうへ避難しようというかたちになってございます。おおむねこの辺りで立岩

地区や野球場のグラウンドのほうもアンダーパスも通って逃げようとしているようなかたちになってきてございます。そういったような方々が大新スポーツ公園やそういった浸水区域内になんとか逃げていただくっていうようなかたちのシミュレーションをしております。

それで、やがて津波がやってくるかたちで、ちょっと早回ししたいんですけども、調子が悪くて大変恐縮なんですけど。こういったかたちで水色のほうが変わってきて津波がやってくるようになります。赤い点々があるのが自動車が遭難してしまっている状況です。当然、国道5号線を走っている車両もございますので、八雲町民の方以外も遭難する想定なんですけど、こうやってやってくると自動車避難中の方々も津波に巻き込まれて遭難してしまう可能性があるというかたちでシミュレーションしてございます。シミュレーションのほう調子悪くて大変失礼いたしました。

こういったようなかたちで自動車避難によるシミュレーションも行っておりまして、自動車での避難も渋滞によって津波に巻き込まれてしまうのが過去の地震災害でもございましたので、こういったこと線路を通行できない場合も含めての自動車避難のあり方を検証してまいりたいと考えてございます。動画のほうは以上となります。

おおむねこの自動車避難の方々が遭難してしまう可能性は、おおむね5%から6%弱の方が今回津波に巻き込まれ、遭難するのではないかとシミュレーションしております。道内でも自動車避難訓練を実施している自治体もございますので、当町におきましても津波防災訓練などを通して、避難の実効性の検証などを行っていきたくないと勘案してございます。

なお、積雪寒冷地特有の事情によりまして、避難の遅れなどに繋がらない対策も必要と考えておりますので、今回の計画に盛り込んでおります。

令和7年度以降に、今回の避難困難地域とされた町内や企業団体などにお声がけしまして、避難所まで実際に歩いてみることや自動車避難訓練を実施するなど、できることから着実に災害対策を進めてまいりたいと考えております。

以上、簡潔でございますが津波避難計画改定案について説明となります。よろしくお願ひします。

○副委員長（牧野 仁君） ただいま説明がありましたとおり、津波避難計画改定案について説明終わりましたが、これについて皆さんから質問等はございませんでしょうか。わかりやすい説明シミュレーションでしたが。

○委員（大久保建一君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 大久保委員。

○委員（大久保建一君） これと関係ないんだけど、知識として、水没っていうか波が来たときに踏み切りってどうなるんだろう。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） J Rの見解では近くにJ Rの車両があると踏切は降りてるということです。

○委員（大久保建一君） なければ通れるんだ。

○防災係長（横木潤也君） 可能性はあります。ただスーパー北斗や普通列車、貨物列車がこの近辺にいたときは最寄りの駅まで乗員乗客を非難させるのがJRの見解ですので、いずれにしても、遮断機が降りてるかどうか開いているかはその場にならないと分からない感じでございます。

○委員（大久保健一君） ある程度の地震が来たっていったらまず緊急停止するでしょ、車両が。それで緊急停止した車両が踏切とどれくらい近くにあるかってことだ。わかりました。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口委員。

○委員（関口正博君） ありがとうございます。ごめんなさい、俺ちょっと詳しくないんですけど、避難が先ほどのシミュレーションからいくと、たとえば落部地域の場合にね、ほとんど居住区というものは浸水しちゃうわけですよ。一時避難はいいにして二次避難というんですか、その後の避難生活を送る場所っていうのはどのように想定されていますか。上の湯に行ったらそういう施設無いですよ。そういう場合というのはどのように。

○防災係長（横木潤也君） 委員長、防災係長。

○副委員長（牧野 仁君） 防災係長。

○防災係長（横木潤也君） まだ公式な町の見解としてはおっしゃることはできませんが、落部支所の二階にそういった設備ができないだろうかという思案はしているところでございます。

津波がひいた後にそういった一時的な施設というか、屋根の付いた施設にとどまっていただけでも手段かなと思っております。落部地域の方々とはじりし水産の地先、もしくは旭丘の高台、落部公園いずれかの屋外の場所に避難してほしいと現状のハザードマップはなっておりますので、屋内の暖のとれる施設というのも今後整備していかなければならない事案かなと思います。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口委員。

○委員（関口正博君） これは落部ばかりじゃなくて、いろんな地域がこれを突き詰めて考えたときは、そこにぶつかっちゃうんですよ。どこまでどうするかっていう部分ですよ。難しいですよ、これすごく。

だから、もちろん最大想定でいくっていうのはものすごく理解できるし、そういうものを言う以上はそういうところまできちんと示していかないとならないというのがこれからの課題なのかなって思いますので、せつかくこういうこと作っていただいているのもあれだけども、無駄に不安をあおるといのが果たして良いのかどうかというものもこれからの課題の一つとして当然あるのかな。

八雲であればどこまでいっても避難できる場所というのは●●確保できるかなと思うけれども、たとえば落部にしても熊石にしてもほかの小さい町にしてみりゃ、落部の支所にしたら全部の人口の見込めるかといったら無理だからね、当然のことながら。

だから、そこはどこで区切りをつけるかはすごく難しいところになってくるなと思いますけれども、僕も勉強していきたいと思っておりますけどお願いします。

○危機対策課長補佐（南川隆雄君） 委員長、危機対策課長補佐。

○副委員長（牧野 仁君） はい。

○危機対策課長補佐（南川隆雄君） 今おっしゃっているとおりだと思います。

実際に今回のシミュレーション、あと津波避難計画を策定する上で苫小牧市に実際に状況の意見交換ってかたちで行かさせていただきましたが、全く今のおっしゃっているとおり
の壁が市レベルでもあると。しかしながら、苫小牧市は民間の施設と協定を結んで、そこで
二階以上を確保するだとかそういった部分もありますので、そういった部分も八雲町も加
工会社さんなのかお肉の工場さんなのかも踏まえて検証していかないとならないのかなと
思います。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口委員。

○委員（関口正博君） ここで災害協定が出てくるのかなと思いますよね。自治体間でもそ
うだし企業間でもそうだし。僕らも視察に行ったときに亙理町で町と町とで災害協定を結
んで、できるところの融通をしていくという。そういうところが肝になっていくのかなとい
うのはなるほどなあと思いました。ありがとうございます。

○副委員長（牧野 仁君） あと、ほかにございませんか。

なければこれで終わりたいと思います。ご苦労様でした。

【危機対策課職員退室】

○副委員長（牧野 仁君） 今日はこれで、だいたい所管の報告を終わりますが、報告事項
について皆さんでこれから協議に入りたいと思いますけれども、今日は1から8番のなか
でこの部分はこうしたほうがいいんじゃないかとかあれば。

○委員（関口正博君） はい。

○副委員長（牧野 仁君） 関口委員。

○委員（関口正博君） これも今日の協議の中ですごく思ったのは、やっぱり熊石の水産試
験研究施設の今後のあり方というのか、これまでの成果っていうのか。なにかやっぱりちょ
っと町のためになってるかといったら、そうでもないような気は皆さんしてるかと思うん
だけども、そこら辺は強くやっぱり町のためっていう部分というのがちょっと見えて
こないと町はお金出して運営してる話ですんで

○副委員長（牧野 仁君） 1億近く出している。

○委員（関口正博君） そこは継続して協議したほうがいい気はします。

○副委員長（牧野 仁君） わかりました。

○委員（関口正博君） だって、ダルスでしょ。ガヤどうなったの。ソイのハイブリットだ
ったっけ。

○副委員長（牧野 仁君） 水産試験所にして4～5年経つの。

○委員（関口正博君） 6～7年経つんですよ。だから、研究だからある程度の期間は必要
だとはね。結局目ぼしいものがイトウの海中養殖、これは確かに研究としては素晴らしいも
のなのかもしれないけれども。

○副委員長（牧野 仁君） ただ町としてはね、どうかなと思うところがあるの。

○委員（関口正博君） じゃあ北海道初のイトウの海中養殖成功が何につながるのかって言われたらさ、そういうものも示してもらわないと。はい、そうですかっていうわけにはいかないですよ。

○議長（千葉 隆君） 結局イトウも今やっているところさ、ふ化事業が成功したとか成功しないとかよりも、サーモンだったら若者に人気で握りでも刺身でも食べる人がいっぱいいるっていうベースがあって参入してるけれども。イトウのさ、買ってくれる高級料亭だとか、そういうところが限定的だから今。

だから、そんなに多く生産してないっていうか、出回っていないっていうのも要因だから、それがあつて程度良いものを作ってやってもどこで買ってくれるかっていうところが大手メーカーが入ってくるとかさ、スーパーあたりとかが買い取りあるっていうなら、中間で卸業者とかが興味を持ってさ、引き取ってあげるとかさ、そういうのを一方であればいいかもわからないけれども。

○委員（関口正博君） あと、あわびの生産が途絶えていきつつあるのも指くわえてみていいのかなって。そんなに熊石地域にとってのあわびってそんななの。それを背景に今までやってきたんじゃないのって。

○委員（大久保建一君） 実績のないワインとかこれから何億もかけて進めるのに、こんなに実績のあるあわびは衰退して。

○委員（関口正博君） これだから本当に傍から見てりゃ本末転倒のような気がするよね。イトウの養殖やる、あわびやめるの。

○議長（千葉 隆君） あわびの海中の飼育はやめるけれども、陸上のやつはやるんでしょ。

○委員（関口正博君） 中間育成はやるけれども。

○議長（千葉 隆君） 中間から放すんでしょ。あれ。放している部分ないの、海中に。

○委員（横田喜世志君） それがもうできなくなってきたって。

○議長（千葉 隆君） 500円だか600円でしか販売できないよっていうことだっけ。じゃあ、そここのところでどういうふうな売り方だとか生産の仕方だとかさ、逆にもうちょっと陸上養殖で大規模にやってあわびの養殖やるとかさ、そういう話には力を入れてこないし、そういう話のためにつながる研究施設でもないんだよね、今。

だから、少なくともあれだけ30回かい、あわびフェスティバル。あわびの里熊石ってことで売ってきてるからさ。そこに供給の部分できなかったのが一時的かもしれないけれども、やっぱり一か所から入れれないからリスクで二か所から入れるとかさ。

ただ、今のやり方は絶対に駄目なんでしょ、もう。潜って餌をやるっていう方式はさ。だからそれだって今更だっけさ。一人になってから駄目だっていつてるわけだから、何年も前からわかってるわけだから、そこを何とかしようっていつて産業育成しないとなんない。

でも、今からだって本当はすべきなんだよね。だってあわびの里をこれだけPRしてだよ、毎年全部買い上げてやって30年もかけてここまで来たときに、はい、駄目でした、で終わるんじゃないかって、ここまでPRするまで時間かなりの投資してるんだよね。だから、そこをやっぱり今再生プロジェクト作るとかできないのかね。

○委員（関口正博君） それも一つの案でしょうね。大々的にただなくするんじゃないかって、あがいてみますって。

- 議長（千葉 隆君） 中間育成を今のままじゃ駄目だとか、福島でもやってるけどあまりよくないとかさ。
- 委員（関口正博君） 今の中間育成施設っていうのがあまりにもわからなすぎて、三澤さんも言ってたんだけど、そこで生産されたものが福島行ってることは有名で、上ノ国でしたっけ。それらがどこにどう流れて行っているのかっていうのはちょっと知りたい。
- 委員（横田喜世志君） 八雲の中間育成施設からは他に行ってない。自分のところのしか。
- 議長（千葉 隆君） あれは中間じゃなくて種苗施設からいってるんだよ。道の種苗施設から。
- 委員（関口正博君） 道の種苗施設からどういうふうにして。
- 議長（千葉 隆君） 直接行ってんのさ。そして、中間育成やってるの。
- 委員（横田喜世志君） 福島だとかで中間育成をやってる。
- 委員（関口正博君） 種苗は熊石でやってるの。中間育成でなくて、種苗がどういうふう流れてるか。
- 委員（横田喜世志君） 種苗が福島とか上ノ国に。北海道に一個しかない。
- 委員（関口正博君） 一個しかないの。めちゃくちゃ貴重じゃん。
- 委員（横田喜世志君） でもそこがさ。
- 委員（大久保建一君） その一個しかないあわびの里がやめるの。
- 委員（関口正博君） だから、おっかないのは種苗生産施設はそしたら熊石じゃなくてもいいじゃんっていうのが怖いね。
- 議長（千葉 隆君） 福島の間中育成だってホタテも。今新しくなったかもしれないけれども、最初にやったところに見に行ったときは、ホタテ小屋みたいなやつでちゃちな中間育成の施設だったよ。
- 委員（関口正博君） 今結構立派になってるはずですよ。
- 委員（三澤公雄君） だけど30年結局あわびフェスティバルって安売りしているだけで、地元にあわびの食文化もなければ変な話、貝殻の螺鈿を使う、そんな工芸ももちろんないだろうけれども、何も無いね。
- 議長（千葉 隆君） それで止まっているのさ。だから。
- 委員（三澤公雄君） あのフェスティバルだって、役場職員丸抱えでやってるものだからさ。
- 議長（千葉 隆君） 消費してるのも、そこが大消費だから。
- 委員（関口正博君） 申し訳ないけれども。
- 議長（千葉 隆君） だけど500円アワビじゃ誰も買ってくれないからさ。だからそれを大きくしなきゃならないからって海面っていうか養殖をやったんだけど、それでも効率が悪いつて。
- だから、中間育成も中間じゃなくて最後まで育成すれば餌代が高いつていって、だから餌食わないアワビを作らないばだめだ。
- 委員（大久保建一君） 育たないべさ。
- 委員（牧野 仁君） 育たないでへい死しちゃう。
- 議長（千葉 隆君） 少しの餌で。

○委員（関口正博君） アワビの海中養殖で餌がどの程度かわからないけれども、大きくなっていくんですね。1年じゃなくて2年であればもうちょっと大きくなる。

例えば4、5年になれば結構養殖ではなくて、天然物の俗にいうアワビの大きさまではいけるんだってね。どうしても1年1年で揚げていくから、そのエゾアワビかどうか知らないけれども、とにかく噴火湾には結構大きいアワビが俺もらうもん、だって。

○委員（大久保健一君） 熊石だって天然はこれくらいあるよ、いるよ。

○議長（千葉 隆君） 天然のほうの方が安くて美味いから、だから養殖はいけないのさ。

○5番（関口正博君） だから、いるの。こんなやつ。

○9番（牧野 仁君） 天然のほうの方が美味い。

○4番（大久保健一君） いるよ。獲ったもん俺。

○5番（関口正博君） したら、餌やなくてもいいんじゃないか。

○議長（千葉 隆君） けどどちらかというと大成のほう。あっちのほう。だから、こっち側は磯焼けで駄目。だから餌をやらなきゃだめなのさ。

○委員（大久保健一君） 相沼のほうにもいるよ。

○委員（関口正博君） だから、熊石にこだわらずそういうことであれば大成と共同事業にするとか。そんなんでもいい気がするけどね。人がいないんであればなおさらさ。

○議長（千葉 隆君） なんかさ、もう少しここまであわびの里で種苗生産施設っていうかさ、生産の拠点があるんだから、活用の仕方ってそっちのほうに人を導入していくほうが、きっとイトウやるより近道だと思うよ。イトウさんには悪いけど。イトウやるよりスズキの魚もいいかな。

○委員（三澤公雄君） 種苗の供給も先が見通せないってなったんでしょ。質疑で明らかになったのは種苗の供給も筋萎縮化、それとも違うものでへい死してるって言ってたよね。

○委員（関口正博君） それでも道の施設は継続していくわけでしょ。

○議長（千葉 隆君） だって仕事受注してるもん、副議長のところで。

○委員（関口正博君） だから今いなくてもちゃんと1年1年、種が入ってある程度。

○議長（千葉 隆君） せたなでもやってる。

○委員（大久保健一君） 本当に一番の問題は担い手だと思うよ。これが居ないからってことでしょ、一番の問題は。

○議長（千葉 隆君） 潜水婦いないからさ、元々潜水で餌毎日やる方式が無理あるんだわ。

○委員（関口正博君） 絶対に無理があるから、養殖方法って今はいろいろあるだろうし、今はそこに沈めて絡めちゃってるからなんかたかた潜ってやんなきゃならないっていうけれども、たとえば●●式のこういう施設の研究してもいいだろうし、いろんなやり方はあるはずなんだけれども。

○議長（千葉 隆君） だから水槽みたいな動くかもしれないけれども、一定の場所でしか動かないなら水槽入れてそのまま流して、餌やるときだけ、あげてそういうふうにとかさ。

○委員（大久保健一君） それが一番いいと思う。

○議長（千葉 隆君） なんか、今の事業を継続させるために再生プロジェクトで、それこそコンサルかけるなり、そういうのをやってどこまでお金かけるかって部分があるけれど

も、だまって諦めることじゃない話だと思うんだよね。だって、あわびの里標榜して30年だよ。

○委員（関口正博君） これを何ですんなり受け入れるのか、熊石の人たちは。

○議長（千葉 隆君） 人いないから。

○委員（大久保健一君） 担い手だって。

○委員（関口正博君） だけどさ、いろんなやり方の可能性だって探れるはずなのに。

○委員（大久保健一君） だから、それがガラガラって開けて餌が反対になったからって、じゃあ続けるとかやるって人もいないんじゃないの。

○議長（千葉 隆君） 人いないでアワビの事業をやめるっていつて、人材確保事業をこれでやろうとしてるんだよ。

○委員（関口正博君） だから、いろいろ不思議なんだわ。

○委員（三澤公雄君） ホタテの中古の船、クレーンついた。あれが一隻港に会えばさ、釣り上げて餌をやるってこともそんなに難しいことではないと思うんだよね。

○委員（関口正博君） だからサーモンでも沖だしして、沈めて餌やるときだけ上にあげるっていう、そういうやり方だってサーモンはしてるし。先進地で。

だから、今なんてそんなの。ただユニック付きの船がないっていうのは確かにそう。ようやっと去年だか一槽入って、そこがやってるだか、採用されたような気がしたけど、違うのかな。

○副委員長（牧野 仁君） かなり事業を見直すしかないかもしれない。

○委員（関口正博君） 一から見直しして。

○副委員長（牧野 仁君） 結局は、採算が合わないからやめるっていうことでしょ。人が足りないのもそうだけれども、今まで経営がギリギリでやりくりしていて人も採用できないで投資もできないままずっと続けてきたんでしょ。ここにきて致命傷が出たのは病気発生して諦めるしかない。

○委員（関口正博君） 事業として成り立たないからというのであれば、これはしょうがないことだろうけど、ただ今までの歩みがあるわけで。それで、ほかの事業に手を付けておきながらこれの人材がいないよっていうのは本当に摩訶不思議だなって。手を尽くしたならあれなんだけれども、なんでそれをすんなり受け入れちゃうのかなというのが不思議だよ。難しいよね。

○議長（千葉 隆君） 少なくとも今残るのは、中間育成の部分だからそこを中心にして中間育成だって補助金入って成り立ってるんだべさ。金出してるんじゃないの、町で。

○委員（関口正博君） 中間育成でお金出してるの。

○議長（千葉 隆君） だって八雲町の施設でしょ。それで、委託費だか何か出してなかった。出してないかな。直接じゃないけれども、ないかな。

○委員（関口正博君） ちょっと調べてみましょう。

○議長（千葉 隆君） だって、もう残されているのがそこしかないから、現実的に。そこ本当にあわびの里なんてないでしょ。

○委員（横田喜世志君） でも現実種を3年、2年入れてないから。

○委員（関口正博君） 種苗施設だって7人だかいるっていったよね。

- 委員（宮本雅晴君） パート入れて10人くらいいる、種苗施設。
- 議長（千葉 隆君） 病気の選別する人とか結構いる。
- 委員（関口正博君） 結構な運営費が道から入ってきてるんだ。
- 議長（千葉 隆君） プロジェクトにいた一番年いってる人は種苗の人だよ。
- 委員（関口正博君） センター長だか。
- 議長（千葉 隆君） だから、あの人だって退職するっていってるんだから、逆に種苗作れるんだから中間育成だって、そこそこ知識があると思うんだよね。
- 委員（関口正博君） 要は種苗の技術があるっていうのはね、●●にはすごく大きいことだと思うんだよね。
- 副委員長（牧野 仁君） もったいないよね。
- 議長（千葉 隆君） だから、その中間育成の部分をやり方変えたりして付加価値つけられるような中間事業所にできないのかだとかさ、あんな小さいあわび誰も買わないって。わりいけど。
- 委員（関口正博君） 八雲町議会監修のあわびカレー作ること一致したから。
- 委員（大久保建一君） あわびチャーハンでもいい。
- 議長（千葉 隆君） 一口サイズの。でも半分だもんな。普通の刺身みたいに薄く切ったらさ、本当にこうだから。半分に切って、それ以上切れないうけ。
- 委員（三澤公雄君） あんなの九州に持っていったら、とこぶしですかって言われちゃう。
- 議長（千葉 隆君） そうだよな。緑色が鮮明に出すぎてるし、養殖だってすぐにばれるもんね、あれならね。あっち黒あわびだから、本州のほうは。
- 委員（三澤公雄君） 復活させるならそっち側で復活できないのかな。エゾアワビじゃ駄目だな。
- 委員（関口正博君） どこだかのやつとハイブリッドつくる取り組みとかって、どうなったのかな。
- 委員（三澤公雄君） 一回報告受けたけど、そのあと病気の話になっちゃったし。成長が早いとか。
- 議長（千葉 隆君） 餌だべさ。餌でやるんじゃないの。いつも来る購読紙の中で日本洋食学会で見てるのは、やっぱりニュージーランドとかオーストラリアであわび作ってるけどデカイのかわ。餌だ。
- 委員（三澤公雄君） 食べるの向こうの人もアワビを。
- 議長（千葉 隆君） なんもこっちにいる人。
- 委員（三澤公雄君） 中国が一番だけどね。
- 委員（大久保建一君） あと副委員長、今日資料提示も当日になったので、みんな何もしゃべれなかったっていうか、喋ってもどうしようもないくらいのレベルであれだけど、関係人口拡大による熊石地域の人材確保に向けた取り組み、これ未だなんも人材確保に向けた取り組みは一つも決まらないまま、活動拠点だけが決まっていってるって話だよな。
- これは、保育園留学がとん挫してしまってから、一個も具体的なものなしにこれ進んでいくんだよね。1億3千万円のすまいるはさ、整備まだしないにしてもさ、なんかみんなこの

500万円かけたって使われるのかって、みんな疑問に思ってるんじゃないかって思ってるんだけど、思ってない。

○委員（関口正博君） 思うよ。

○委員（横田喜世志君） 誰か来たときに泊まるとか。

○委員（大久保建一君） だけど誰か来る確証がないし、誰か来てもらう方法もまだないんだよ。だけど、一番先にそっちじゃないのって思うけどさ。

○議長（千葉 隆君） 誰か来たときに泊まる場所ないって、ひらたない荘あるべきね。

（何か言う声あり）

○委員（横田喜世志君） 指定管理側が次はこういう予定がありますとかって言っただけでこないと。

○議長（千葉 隆君） やっぱり絞るべきだよ、やるとしても。これすごく大きいことばかりだよ。ワーケーション事業、親子体験入学、民間募集サイト利用、お試し住宅、空き家物件の確保、地域おこし協力隊の受け入れ事業だよ。

お試し就労事業、インターンシップ受け入れ事業、研修機会の提供、地域交流イベント事業、自然体験活動開発事業、産業体験活動開発事業って、今の熊石の支所の職員全部導入して1年かけてもやれるかわかんないような事業をさ。

○委員（大久保建一君） だから一個でもいいからさ、なんかスタートしてそのためにこれで人を呼ぶんだってというのがあって整備するならいいけれども、どうしようもないって職員も俺たちもみんなわかっていながら活動拠点だけを整備していくのが、すごくむなしくてしょうがないんだけど。

○委員（関口正博君） 特化できないのかね。キャンプ場整備今年あるっけ。その自然学習とやらがそういうことに繋がっていくんであれば、どこかに特化してね。

○委員（三澤公雄君） 具体的にサーモンこの時期なら夏休みに何組の申し込みをとりましてただとか、一件でも二件でもそんなのがあればそれを大事にしていこうとか。

○委員（大久保建一君） そういう報告があったうえでのこれならわかるんだけどさ。

○委員（三澤公雄君） なきゃおかしいと思うんだよね。彼らが活動してるってことであればさ。

○委員（大久保建一君） このままでいったら当然すまいるなんて着手できないし、使わなかったら使わなかったで建物は傷んでいくだろうし。あわび養殖体験事業。

○委員（関口正博君） だからさ。少ない人材をさ、これは前にも言ってるんだよ。グループとお話をしたときに、それこそあわびのセンターの所長がいたから、あわび生かす方法を考えられて、議会と懇談したなかで言ってるはずなんだわ。

○議長（千葉 隆君） 結局、拠点を作ってパソコンとか買うためには理解を得るためにはこんなこともやりますって出さないと整備の事業と備品費承認受けられないからって頭出し出してるのは事実だっていうのは、みんなわかってるんだよ。

だから、議会のほうとしては本当の個々の人材育成事業だとか具体的にやれることをさ、いっぺんにこれやるみたいな話をしてるけれど、いっぺんに全部なんてできないでしょ。

令和7年度に何をどういうふうにするのかだとかっていうことを詰めていかないのいけないで、ただ500万と440万の部分だけ出てきてるような感じだ。

最終的にはこういうことも全体やりたいのはわかる。だけど、令和7年何やるんですか、それに対してどれくらいの人が出て、どういうふうな人たちでいくらくらいお金がかかることなのそれって言う。だって、空き家物件の確保事業っていったって情報収集と条件整理するのに人件費がいるでべさって。それを令和7年度にやるのかいとかさ。

だから、これは今年やらないって言って、そしたらインターンシップやるのかいっていったら、やらないって。それで聞いてみたら、単に例大祭と熊石のマルシェやるだけだったとしたら、そこに拠点があるんですかっていうことになるよね。

○委員（関口正博君） 補正6月だけ。

○委員（大久保建一君） 補正は6月予定。

○議長（千葉 隆君） もっと言えば赤井さんが前からいってるけれども、八雲町だったら団体があって、その拠点もなくしてでもみんな集まって何かをやってそういう中である程度事業として成り立っているから拠点があるよとか事業費が欲しいってやってるんだけど、ここの団体の実績がないから、なかなか先に整備していいのかいって言う話だと思うんだ。熊石のほうがそういうやり方していいのかって。

そうしたら、彼らは自分たちで1万円ずつ出して株式会社作りまして。株式会社として今の事業計画が本当に事業計画とここの今の町が打ち出している人材確保と人口拡大の部分と一致した事業になっているのかいってことさ。だけど、そこがなんとなく実際にやるのは株式会社でやるっけさ。

だけどこれだけ見れば八雲町がやるようなことになってるっけさ。だからよくわからないんだよね。八雲町が本来は自治体がやらないとないことを委託してやるのかさ。言ってる意味わかんないかな。

○委員（大久保建一君） 要は何にも決まってないってことですよ。なんもやること決まってるのに買ってしまったって話ですよ。

○議長（千葉 隆君） そしたらそういうふうに大久保さんが言うのは端的なんだけれども、予算が出てくるっけ、6月に。だから、必ずやるという事業内容がわからないのに改修しますよって言うてきたときに、納得できないんじゃないのかなって。

○委員（大久保建一君） 言っといたほうがいいんじゃないの。関係人口拡大の具体的施策って言うか事業案とかがって何にも進捗がないままこれが出てこられてもとらないよって、言っておいたほうがいいんじゃないかなって。

○副委員長（牧野 仁君） 伝えておきます。具体的な進捗状況が見えない中で予算付けするのはいかがなものかと。それまで今度、委員会を開くときに説明求めてもいいし。3月もあるし。それでもいいし。それはうちの委員会で。

○議長（千葉 隆君） あるのかもわからないしね。

○副委員長（牧野 仁君） 資料急にみんなに渡されて中身見ないうちに。あとで、みんなと相談してから決めると。そういう意見がありましたと伝えますか。

あとはもう一点、さっき話したあわびの養殖状況もそうだけれども、これも何か策を考えてほしいともうちょっと産業課に求めてもいいのかなと思います。

○議長（千葉 隆君） 戻るけれども、二拠点生活体験事業っていうのは、この拠点というのはくまこう館とあゆかわ館の拠点二つのこと言ってるの。それとも、ワーケーションと親子体験事業の二つのことは二拠点。

○委員（三澤公雄君） 二拠点というのは、東京や大阪なり一つの活動場所を持っている人がもう一か所として熊石を選んでもらうっていう、そういう人が引っ張ってくるという意味かなと思う。いわゆる今流行りの二拠点生活だとか、そういう二拠点かなと思います。今そっくり引っ越してくる移住というより、生活基盤の一つって。

○副委員長（牧野 仁君） 議長が言うようにたくさん事業法が載せられてるけれども、我々も理解ができない部分がたくさんあるので、これをもうちょっと丁寧に説明してもらいますか。

○委員（三澤公雄君） 本当にやるんだったらもっと具体的にできるような。

○議長（千葉 隆君） やるときは何もないから保育留学のやつくるんだって言って、やめるときは何もないからやめるって、そういう流れだよな。

○委員（大久保健一君） 締めるなら締めないで。

○副委員長（牧野 仁君） わかりました。

今日はこれくらいに意見が出たので、あとで私と事務局と相談して決めていきますので、よろしいでしょうか。

（「はい」という声あり）

○副委員長（牧野 仁君） これで終わります。今日のご苦労様でした。

[閉会 午後 2時17分]